

一 般 社 団 法 人 日 本 体 育 学 会

体育心理学専門領域会報

第26号（通巻第54号）

体育心理学専門領域

2014年7月発行

一般社団法人 日本体育学会体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、一般社団法人日本体育学会 体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単位無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。
- 附則
1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
 2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
 3. この会則は、平成21年8月27日から施行する。
 4. 平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。

体育心理学専門領域の役員

任 期：平成25年4月1日～平成27年3月31日

会 長：中込四郎

理事長：関矢寛史

理 事：学会大会委員会（○今中國泰、磯貝浩久、佐々木万丈、土屋裕睦）

企画委員会（○伊藤豊彦、東山明子、杉山佳生）

広報委員会（○石井源信、菅生貴之、森 司朗、内田若希、荒井弘和）

庶務・会計委員会（武田守弘、田島 誠）

○委員長

監 事：田村 進、木島章文

幹 事：佐々木丈予

事務局は広島県東広島市鏡山1-7-1広島大学大学院総合科学研究科・関矢寛史研究室とする。

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第26号（通巻第54号）

体育心理学専門領域

2014年7月発行

巻頭言

体育心理学専門領域「会報」（第26号）の刊行によせて

体育心理学専門領域会長 中込四郎

体育心理学専門領域の会員の皆様には、平素何かとご協力をいただき感謝申し上げます。

日本体育学会の法人化に伴い、本会はその傘下に位置づけられていた「専門分科会」から、組織上は直接の繋がりを持たない「専門領域」との名称変更を経て活動を継続してきております。恐らく、体育学会本体はそれによる各専門領域の学会離れを危惧されているのではないかと想像いたしますが、個人的にはこのような位置づけ及び名称変更に積極的な意味づけをしております。それは、今年度に入り学会本体から各専門領域に対して「体育・スポーツ科学情報コラム」への執筆依頼や「政策検討・諮問委員会委員」の選出、そして「体罰・暴力根絶のための検討課題」の割り振り等がなされるなど、専門領域に所属する一部の会員の方々に協力願っているという現状があるためです。このような共通の課題に取り組む事によって、学会との歩みが緊密になっていくものと期待されます。

また、専門領域として位置づけられる事により、専門分科会の時よりも他専門領域との仕切りが緩くなって行くのではないかと考えています。体育・スポーツ・健康運動の理解を深めていくには、言うまでもなく、単一領域からのアプローチのみで現場に役立つ成果を多く期待できません。人間を対象とした時、必然的に他専門領域との連携、さらには、領域横断的な新たな理解の方法を採用するアプローチを構築していくことが求められます。学会大会等での研究発表において、研究課題によっては、より積極的な他専門領域での発表や、またその逆に、他領域からの発表希望の増加につながるような間口が広くまた懐の深い体育心理学専門領域を目指したいものです。

私たちの専門領域はその実現可能性あるいは役割が大きいと考えます。なぜなら、心理学領域での研究は他よりも多様な研究方法をこれまで採用してき

ているからです。それは人間の「こころ」を研究課題とすることの複雑さ、困難さを物語っているとも言えます。各専門領域が研究対象であるヒトを強く意識するならば、心理学的理解の方法を避けて通れなくなるのではないかと思います。特に、広義の健康運動を課題とする研究報告の多くに、心理尺度の活用（従属変数の採用）を認める事ができ、このような状況下では、私たちの専門領域の果たす役割が大きいと考えねばなりません。そこでは、積極的な他専門領域との研究協力だけでなく、研究課題に沿ったより有効な心理尺度の開発、さらには安易な心理テストバッテリーの活用への警鐘も時には必要となるようです。

もう一つ忘れてはならないのが、私たちの領域の独自性につながるような専門性の追求もまた、質の高い他との連携を行う上で大事な側面となっているはずです。心理学は個別事象（個人差）の理解から出発した研究領域と受け止めています。研究のスタートである個別事象の精緻な理解においても私たちの専門性を活かせるはずです。

最後に、この場をお借りしてお礼申し上げます。私は今年度の岩手大学での学会大会を区切りに2年2期務めてまいりました体育心理学専門領域会長の任期を終わらせていただきます。この間、特に大阪体育大学ならびに広島地区の事務局の先生方には大変お世話になり感謝申し上げます。今後益々、本専門領域が充実されていくことを祈念申し上げます。

体育心理学専門領域会報 第26号
目次

巻頭言	i
目次	ii
I. 日本体育学会第64回大会関連	
1. プレセミナー	
題 名：これからの教育研究環境における体育心理学	
司 会：東山明子（畿央大学）	1
演 者：佐久間春夫（立命館大学）	2
傍聴記：平木貴子（日本大学）	3
2. キーノートレクチャー1	
題 名：スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学	
司 会：楠本恭久（日本体育大学）	4
演 者：荒井弘和（法政大学）	5
傍聴記：米丸健太（国立スポーツ科学センター）	6
3. キーノートレクチャー2	
題 名：知覚・認知と運動行動における無意識性・潜在性	
司 会：伊藤豊彦（島根大学）	7
演 者：今中國泰（首都大学東京）	8
傍聴記：中本浩揮（鹿屋体育大学）	9
4. シンポジウム	
題 名：チーム力の育成	
司 会：土屋裕睦（大阪体育大学）	10
演 者：松田 保（びわこ成蹊スポーツ大学） コーチングの事例から	11
演 者：遠藤俊郎（大東文化大学） スポーツにおける「チーム力」とは？	12
演 者：山浦一保（立命館大学）	13
リーダーシップ研究における“関係性モデル”から考える	
傍聴記：内田遼介（大阪大学大学院）	14
5. 口頭発表（座長報告）	
座 長：筒井清次郎（愛知教育大学）	15
座 長：磯貝浩久（九州工業大学）	16
座 長：北村勝朗（東北大学）	17
座 長：土屋裕睦（大阪体育大学）	18
座 長：永山貴洋（石巻専修大学）	19
座 長：島本好平（兵庫教育大学）	20

6. ポスター発表記	
発表者1：村上孝之（金沢大学）	21
発表者2：須永茉莉（広島大学大学院）	22
7. 大会参加記	
大会参加記：深見政志（日本体育大学大学院）	23
II. 研究会の活動報告	
スポーツ社会心理学研究会：西垣景太（中部大学）	24
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会：高妻容一（東海大学）	25
運動学習研究会：山本裕二（名古屋大学）	26
臨床スポーツ心理研究会：千葉陽子（筑波大学大学院）	27
スポーツ動機づけ研究会：菅生貴之（大阪体育大学）	28
III. 研究室紹介	
研究室紹介：菅生貴之（大阪体育大学）	29
IV. 学位論文紹介	
中須賀巧（福山平成大学）	31
門利知美（川崎医療福祉大学）	33
西垣景太（中部大学）	35
竹村りょうこ（慶應義塾大学）	37
鈴木 敦（国立スポーツ科学センター）	39
下園博信（九州共立大学）	41
今村律子（九州工業大学）	43
永尾雄一（日本障がい者スポーツ協会）	45
V. 海外情報	
内田若希（九州大学）	47
VI. 日本体育学会第65回大会関連	
日本体育学会第65回大会案内	49
VII. 事務局報告	
平成25年度日本体育学会体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録	50
平成25年度日本体育学会体育心理学専門領域総会議事録	52
平成26年度日本体育学会体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録	55
資料1	58
資料2	59

編集後記

I. 日本体育学会 第64回大会関連

司会報告

東山明子（畿央大学）

連日の異常な猛暑がようやく和らいできた8月27日（火）午後3時から、体育心理専門領域プレセミナーが立命館大学びわこ・くさつキャンパス内エポック21のK310室にて開催された。今年度のプレセミナーは「これからの教育研究環境における体育心理学」のテーマのもとに、佐久間春夫先生（立命館大学スポーツ健康科学部教授）による話題提供とディスカッション、さらに開設4年目とまだ新しい立命館大学スポーツ健康科学部の研究実験施設見学ツアーの予定であった。

昨年11月下旬の初めての理事会での企画委員会でプレセミナーをどうするかを検討をすることになり、12月には委員の島根大学伊藤豊彦先生と九州大学杉山佳生先生と東山でのメール会議でプレセミナーの内容について相談を始めた。日本体育学会第64回大会は立命館大学びわこ・くさつキャンパスと聞き、それならスポーツ健康科学部には体育心理専門領域の会員である佐久間春男先生がおられるのではないか、奈良女子大学の副学長もされていたし、現在の立命館大学ではスポーツ振興担当の学生部長をされている、体育心理学のこれまでを踏まえて未来を語れる最適な人物である、とすぐに人選が決まった。早速に佐久間先生に電話でプレセミナーでの話題提供と場所のお世話等のお願いをしたところ、大変お忙しいにもかかわらず、ふたつ返事で快諾いただいた。年が明けて1月には企画委員と佐久間先生との現地打ち合わせも行い、その場で開催場所の部屋の確保もしていただき、企画担当としては大変楽をさせていただいた。

当日、企画委員長の伊藤先生から簡単な開催のあいさつと講師紹介がされ、すぐに話題提供へと移った。佐久間先生はたくさんのパワーポイントを用意され、ご自身の研究者としての始まりから今日までの歩みと研究テーマや内容、そして奈良女子大学での副学長としての学部枠を超えた改組の構想や現所

属大学での未来への発展を視野に入れた学部内容など、予定の1時間を越えて語っていただいた。引き続いてのスポーツ健康科学部の実験研究施設見学ツアーでも、ご多忙の中、時間いっぱいまで最先端の施設や設備を見せて頂いた。

開催に先立ってのプレセミナーへの参加申込では12名の参加予定であり、ごく少数のささやかな集まりを想定していた。ところが、申し込みなしで直接会場に来てくださった方も多く、最終的には32名の参加者を迎えることができた。参加者の半数以上が若い研究者や大学院生であり、佐久間先生のアクティブな軌跡と開拓精神に刺激を受けて視野が広がったのではないかと感じられた。体育心理学の発展のために走り続ける研究者のエネルギーに姿に触れて、自分自身の研究生活を見直し気持ちを引き締めるきっかけをいただいたようにも思う。時間の都合で当初予定していたディスカッションを省略したが、申し訳なかったが、参加者の方々と豊富な話題を提供してくださった佐久間先生、またプレセミナー開催にご協力いただいた関係者の方々に感謝したい。ありがとうございました。



企画委員の伊藤豊彦先生（島根大学）・東山明子先生（畿央大学）

これからの教育研究環境における体育心理学（35年の教員生活を振り返って）

佐久間春夫（立命館大学）

今日、体育学部、スポーツ科学、スポーツ健康科学等その名称に違いがあるものの、体育・スポーツを中核にすえた教育・研究に携わる学部・大学は26にのぼり、各大学の経営戦略上の問題だけでなく、この分野における社会的なニーズと関心の高さが伺える。筆者が大学教員としてスタートした1979年頃から議論されてきた大学教養課程における正課体育の廃止の議論に対し、そのことが単に教養課程の問題にとどまらず、そこに教員を輩出している専門学部の問題として体育心理専門分科会においても議論された経緯がある。しかし、ご存知のように1991年の大学設置基準の改正、いわゆる大綱化により、必修は廃止され、教養教育のスリム化、さらに1997年6月、国公立立を問わず、また、教授から助手まですべての大学教員に「任期制」を導入することができる「大学教員任期制法」の成立は、その目的として「多様な知識又は経験を有する教員等相互の学問的交流が不断に行われる状況を創出することが大学等における教育研究の活性化にとって重要であることにかんがみ、任期を定めることができる場合その他教員等の任期について必要な事項を定めることにより、大学等への多様な人材の受入れを図り、もって大学等における教育研究の進展に寄与すること」とうたわれているが、結果的には特に若い教員の身分の不安定化と継続的な研究環境の構築を行えにくい状況を作り出しており、教育面においても継続性の観点からは受入れ環境の不安定さと共に、必ずしも人材の有機的な流動化を生み出していない。さらに、2004年の国立大学法人化とその翌年の大学機能分化の促進（中教審大学将来像答申）は、組織のスリム化と大学の多様化を見据えたそれぞれの大学の特色・個性を明確に打ち出すと共に、国際化の推進、世界的な教育研究拠点の形成、地域振興の核、イノベートできる学術研究の推進が求められている。

このような大学を取り巻く環境の厳しさの中で、

体育・スポーツ専門大学・学部はもちろんのこと学会としても体育心理学の専門性・社会的有用性（優位性）をいかに打ち出していくか。機能分化の面では、特定の専門分野（芸術、体育）の教育研究を行う点で、差異化はできるものの、同種の大学間での差別化を如何に図るか。この点で、一例として立命館大学の本学部は、遺伝子レベルからスポーツ・健康行動までのコンセプトのもと、グローバルな視点（英語がすべてではないがプレゼンテーションが求められる）とリーダーシップを取れる（PBL; Project Based learning, 地域貢献等）人材の養成に向け、心理学関係では、スポーツ・健康心理学と組織心理学のスタッフが配置されている。研究面でも、IF; impact factorやESI; essential science indicatorや科研費の取得率（13学部中第1位）がよく話題となる。

学会での体育心理学専門領域発表演題数（15専門領域の中では2番目－2013年）の多さが物語るように、スポーツ行動を行うヒトを対象とする以上、心理学は中核分野と言える。また、社会的な要請に応えるといった実践的な指導面においても、教職免許やスポーツメンタルトレーニング指導士等の資格の付与や取得は、機関としても、個人としても、専門家としての社会的な説明責任を果たす上からは重要である。

最後に、年寄りの繰言として。大学紛争を経験してきた世代として、40年程前は産学協同はもってのほか、社会とは超越し、学問の純粋性を追い求めることに大学の存在意義を認め、どこか牧歌的な雰囲気があった当時の大学とは、今日隔世の感がある。求められる大学、専門領域を含め、適応するとは常に変わっていくことであるかもしれない。

傍聴記

平木貴子（日本大学）

久しぶりに体育学会のプレセミナーに参加した。今年度から所属先が変わり、教育現場に身を置くようになってから、自分の興味関心の変化もあり、今回のテーマ「これからの教育研究環境における体育心理学」に魅かれたからだ。セミナーの感想は後に述べるとして、まずは、セミナーの概要に触れよう。

今回のプレセミナーは平成25年8月27日（火）15時から17時に開催された（場所；立命館大学くさつキャンパス）。今回のプレセミナーは2部構成となっており、第1部で話題提供とディスカッション（15時～16時30分）、第2部（16時30分～17時）で希望者への立命館大学スポーツ健康科学部 実験施設見学ツアーが企画されていた。第1部の話題提供とディスカッションは上述したテーマで佐久間春夫先生（立命館大学 スポーツ健康科学部 教授）が35年の教育・研究生活を振り返りながら、体育心理学のこれからについてお話くださった。諸藩の事情で第1部が16時までになったのは大変残念であったが、先生のお話を伺いながら、自分自身や周囲の人たちの現状、これからこの分野を担う者たちがやっていかなければならないことについて思い返したり、イメージを膨らませたりすることができ、有意義な時間を過ごした。

話題提供の中で、特に印象に残っていることについて、感想を交えて述べることにする。先生は冒頭の所で、「僕たちの時代は、修士号を取得すれば、確実に大学教員になれる時代だった」と語られた（先生のお話の中では随所に謙遜のお言葉がちりばめられていたので、上述の言葉もその1つであると受け止めている）。率直な意見として、博士号を取得しても就職が難しい我々世代にとっては、凄く羨ましい話である。そのお話を伺いながら、我々はこのような苦しい現状をどのように捉えたら良いのかについて考えていた。ポジティブに捉えれば、それだけ体育心理学という分野が発展し、より専門性が

求められてきているということだろう。一方で、今回のセミナーで先生が“大学体育の危機”という内容で語られているように体育自体の意義が問い直されている現状で、体育心理学に身を置く者が、教育で、研究で、実践現場で、世の中にどのくらい貢献するかも、シビアに試されているということなのだと思う。先生はご自身の豊富な研究・教育実績を語る際、「僕は飽きっぽいのでいろいろな分野に手を出したから…」と謙遜の言葉をおっしゃっていたが、お伝えになりたかったことは、これからは分野を広げていくだけではなく、自分の専門に留まって、“こつこつ続けていくこと”“深めていくこと”が体育心理学を専攻する者が生き残っていくためには必要であるということではないかと受け止めている。不安になると動き回りたくなる。世の中の流れに身を任せていた方が楽なことが多い。肯定・否定様々な意見が飛び交う中で、動向を把握しつつ、「これで良いのか」「自分の進んでいる道に意味はあるのか」という自問自答を繰り返しながら、留まり続けるというのは、不安で孤独な作業である。今、自分が立っている道は、今一度、覚悟して進む必要がある道だなと思った。

今回のプレセミナーでは、これからの自分の道について考えをめぐらすことができた。最後に話題提供をくださった佐久間先生、このような機会を作ってくださった先生方にお礼申し上げて、傍聴記の終わりとしたい。

司会報告

楠本恭久（日本体育大学）

このたび、荒井先生より依頼をいただき、キーノートレクチャー「スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学」の司会を担当させていただきました。ざっと眺めたところ、会場には、100名程度の方々が参加してくれていたと思われます。ご参加くださり、ありがとうございました。

ところで、なぜ私が、荒井先生のキーノートレクチャーの司会を担当するのか？と不思議に思われた方もいらっしゃると思います。そこで、荒井先生との接点について、すこしだけお話しさせていただきます。

私と荒井先生は、荒井先生が日本大学の心理学科に在籍していた大学2年生の時に、偶然出会いました。私は当時、本務校の日本体育大学で仕事をする傍ら、非常勤講師として、日本大学の心理学科で「心理学基礎実験」という授業を担当していました。

その受講生の中に、たまたま荒井先生がいたので、荒井先生が、進路について悩んでいると私に話しかけてきた日のことは、今でもはっきりと覚えています。その後、大学院進学に向けて、研究計画の相談を受けたり、指導教官である竹中晃二先生を紹介させてもらったりという形で、荒井先生のキャリア展開に微力ながら貢献させていただきました。

さて、本題に入ります。今回のキーノートレクチャーは、荒井先生にしかできない、オリジナリティの高いレクチャーになっていたと感じています。政策（スポーツ基本計画）に対してアプローチをする場合は、社会学、政策学、経営学といった領域からアプローチするのが一般的だと思います。今回、荒井先生が、政策に対して心理学からもアプローチすることができるという視点を提供したことの意味は大きいと思います。

スポーツ基本法では「スポーツの果たす役割を踏まえ、目指すべき具体的な社会の姿」が、以下のよう

1. 青少年が健全に育ち、他者との協同や公正さ

と規律を重んじる社会

2. 健康で活力に満ちた長寿社会

3. 地域の人々の主体的な協働により、深い絆で結ばれた一体感や活力がある地域社会

4. 国民が自国に誇りを持ち、経済的に発展し、活力ある社会

5. 平和と友好に貢献し、国際的に信頼され、尊敬される国

上記の中には、心理学のキーワードが多くちりばめられています。私も、スポーツ基本計画が推進されるために、スポーツ心理学者が活躍するべきではないかと考えています。

今後、荒井先生には、「政策に対する心理学的アプローチ」という新たな領域を切り拓いて欲しいと願っています。そして、若い力で、体育心理学・スポーツ心理学領域をリードして欲しいと思っています。

その結果として、私は、先生が自身で提示した公約のとおり、「親学問で暴れる」姿を見ることを楽しみにしています。

演者報告

荒井弘和（法政大学）

日本体育学会第64回大会において、楠本恭久先生（日本体育大学）の司会の下、「スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学」という表題でキーノートを担当させていただきました。キーノートを依頼していただいたとき、とても感激したことを鮮明に覚えています。喜び勇んで、担当させていただきました。

はじめに、「スポーツ基本計画をどうやって支えるか？」という論点でお話をしました。スポーツ基本計画の中で、「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」として示されている7項目を示した上で、私の仕事と関連の強い1-4の項目について、私が行ってきた研究を紹介しました。

「1. 学校と地域における子どものスポーツ機会の充実」については、「小学校体育」と「運動部活動」の研究、「2. 若者のスポーツ参加機会の拡充や高齢者の体力づくり支援等のライフステージに応じたスポーツ活動の推進」については、「若者（大学生）」と「中高年（がん患者）」の研究、「3. 住民が主体的に参画する地域のスポーツ環境の整備」については、「障害者の支援」と「ソーシャル・キャピタル」の研究、「4. 国際競技力の向上に向けた人材の養成やスポーツ環境の整備」については、「チームビルディング」の研究を紹介しました。

つぎに、スポーツ基本計画の先を見据えて、私が今後行おうと考えている研究テーマを挙げました。それは、「人権」「連帯」「スポーツパーソンシップ」の3つです。

「人権（公平な社会）」については、「スポーツ・フォー・エブリワン」をキャッチフレーズに、「スポーツ格差の解消」「スポーツ弱者に寄りそうスポーツ心理学」というキーワードを挙げました。「連帯（協同・協働する社会）」では、「スポーツを通して人と人がつながる」をキャッチフレーズに、「チームビルディングからピースビルディングへ」

というキーワードを示しました。「スポーツパーソンシップ（公正な社会）」については、「オリンピックズムへの回帰」をキャッチフレーズに、「スポーツを通して、自分なりの倫理・道徳を身につける」「あるべきスポーツの姿＝オリンピックズム」「スポーツの武道化」というキーワードを挙げました。

最後に、「私の公約」として、以下の3つを示しました。それらは、「世界発・日本初ではなく、日本発・世界初を行う」「First authorとしてだけでなく、Second authorとして誰かの研究に貢献する」「専門学会に特化するのではなく、親学問で暴れる」です。3つめの「親学問で暴れる」について説明を加えると、偉大なスポーツ心理学の先輩方の志を受け継いで、親学問（＝心理学界）で研究成果を発表し、対話を行うことで、スポーツ心理学のすそ野が広がることに貢献したいということになります。

今回のキーノートに伴って、「Health」「Earth」「Sports」を合わせて名付けた「HEARSP0（アスポ）」という、荒井ゼミの公式キャラクターを紹介しました。アスポのコンセプトは、「スポーツで世界を健康に」です。スポーツ心理学がさらに発展して、世界が健康になる、つまり、世界が平和になるプロセスに貢献できるよう、地味に、地道に、精進して参ります。

末筆になりますが、司会の楠本恭久先生、平素より私をご支援くださっている皆様、そして、キーノートにご参加くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

傍聴記

米丸健太（国立スポーツ科学センター）

日本体育学会第64回大会（於：立命館大学びわこ・くさつキャンパス）にて行われた、法政大学の荒井弘和先生によるキーノートレクチャー1「スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学」を拝聴いたしました。

先生は、最初に自己紹介をされた後、「スポーツ基本計画」の概要を示し「スポーツ基本法」の目指す具体的な社会像の中に、「健全」「協同」「公正さ」「活力」「一体感」など心理学で扱われる用語が多く含まれていることを指摘されました。そして、スポーツ界における心理的な課題への関心が高まっており、スポーツ心理学の社会貢献が期待されていると述べられました。私は、確かにそうだなと思いながらも、正直なところ、どこか自分とは少し距離のある話題のように感じながら聞いておりました。

すると先生は、続けて、自分の専門を社会の中に組み込むことが重要だと述べられた上で、これまでご自身の関わってこられた様々なテーマの研究成果（例えば、身体活動の心理・社会的効果、アスリートの競技力向上など）を紹介しながら、スポーツ心理学と「スポーツ基本計画」の関わりについて示されました。このとき私は、スポーツ心理学の研究成果を社会（現場）に還元していくこと、また現場の課題を研究に取り上げ社会の要請に応えていくことの重要性を改めてご指摘されているように感じました。また、今後「スポーツ基本計画」が実行されていく中で、自分の研究が、「スポーツ基本計画」のどの部分に関わっているのかを認識しながら研究を進めていくことが必要だと指摘されているようにも感じ、「スポーツ基本計画」を支えるというテーマが自分にも関わりのある課題だということに気づかされました。私自身は、現在、アスリートの国際競技力向上に関わる研究・支援を進める研究機関に所属しています。その社会的な責任や現場（社会）との関係に対して、もっと自覚を持って研究に取り組

まなければならないと改めて考えさせられました。

先生はさらに、研究成果を示された後、これまでのご自身の研究活動を振り返りながら「幅広いので少し狙いを定めないといけない」と自省され、今後の活動について「スポーツで世界を健康＝平和に」といったテーマで“公約”を掲げ、「親学問で暴れる」と宣言されていました。先生がこれまでのご自身の姿勢・立場を踏まえ、スポーツ心理学者として今後どのようにスポーツ、学問、社会と関わっていくか（「スポーツ基本計画」を支えるか）を方向付けられていたように感じました。私がスポーツ心理学者として社会に関わっていくためには、研究者としての自分の立ち位置や方向性を定めていくことが必要だと気づかされました。このことは、研究者として当然のことかもしれませんが、私にとっては少し時間のかかる課題だと思います。先生が強調されていたように、「先輩方に感謝」しながらスポーツ心理学の世界に身を投じ、自分の専門について理解を深め、少しずつ研究者としての自分を定めていきたいと思いました。

最後になりましたが、本レクチャーを通じて、今後の自分の取り組みを見直す機会を与えてくださった荒井先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

司会報告「知覚・認知と運動行動における無意識性・潜在性」

伊藤豊彦（島根大学）

立命館大学（びわこ・くさつキャンパス）で開催された日本体育学会第64回大会における体育心理学専門領域キーノートレクチャー2は、首都大学東京の今中泰先生に「知覚・認知と運動行動における無意識性・潜在性」のテーマで講義をお願いしました。

先生の豊富な研究キャリアに裏付けされた多様な情報をわかりやすく提供していただいたことに対して、まずもってお礼申し上げたいと思います。門外漢の本司会者にとっても、先生の講義は極めて興味深く、知的好奇心を呼び起こすものであり、講義の底に流れる先生の研究に対する真摯な姿勢と温かいお人柄も相まって、自身とは異なる領域の優れた研究知見に触れることができたことは学会ならではの充実した時間であったと思います。

レクチャーは、情報収集、学習、思考などの人の精神活動は、ごく一部が意識に上がり、大部分は無意識的に生じるものであること、また、このことは運動における知覚・認知・運動過程でも同様であることから、無意識過程はどのように意識的過程と連携し、知覚・認知・運動に関与するか？という問題が提示され、ここで扱う無意識を努力・注意などで意識化可能な「前意識」であることを明確にした上で始まりました。

まず、「無意識的知覚と運動反応」のテーマでは、逆行マスキング条件下の体性感覚・視覚反応時間に関する実験結果から、身体は感じない、見えない刺激に反応すること、また、他者の動きの速度が自分の運動速度に反映されることを興味深い実験例からわかりやすく解説いただきました。

つぎに、「スポーツ課題にみられる知見」では、無意識的なフィードバックによって運動学習が促進されることを示すとともに、サッカーのペナルティーキックという実践的なスポーツ課題において意識できないはずのゴールキーパーの位置がキックの方

向に影響していることを示す実験例を示されました。さらに、「選好判断・意思決定に関する知見」では、ラットの実験結果を示しながら、意思決定が必ずしも大脳皮質による明確な意識的な判断に基づいて行われているわけではなく、情動といった無意識的な過程が関与している可能性に言及されました。

個人的には、スポーツにおける無意識過程の影響が印象に残っており、キーパーが得意な方向をわざと開けておくといった戦術が可能なのかといった素人考えやバレーボールのサーブやアタックにおける無意識的な過程の影響はといった興味や疑問が湧く内容でした。

今中先生は、現在、香港大学のMasters先生やエストニア・タルト大学のBachmann先生などとの共同研究を精力的に進めていらっしゃるとうかがっていますので、今後さらにご研究が発展し、われわれにご教示いただけることを願っています。また、知的な刺激を受けられたフロアーの皆様にとってこのレクチャーが今後の研究発展のきっかけとなることを期待しています。

最後に、レクチャー終了後も30分以上にわたりフロアーの先生方からの質問に丁寧に対応していただいた今中先生に改めてお礼申し上げますとともに、ご参会いただいた多くのフロアーの皆様に心からお礼申し上げ、座長報告とさせていただきます。

演者報告「知覚・認知と運動行動における無意識性・潜在性」

今中國泰（首都大学東京）

本講演では、ここ10年余り思いめぐらしてきたテーマ「知覚認知と運動行動の潜在性・無意識性」について紹介させていただいた。運動行動や精神活動は、通常、明確な自由意思のもとに意識的・注意的に実行していると思われがちであるが、よく考えてみると、その多くは潜在的・無意識的であり、意識にのぼるのはそのごく一部に過ぎない。最近の知見によれば、こういった無意識的過程は、感覚・知覚・運動から高次認知活動まで、行動全般に幅広く関与しているようである。本講演ではいくつかの切り口からそれらの知見を紹介した。

一般に、無意識といえばフロイトの無意識（抑圧されていて意識化困難）が想起されるが、本講演では「無意識」をフロイトの前意識（努力や注意などで意識化可能）に準じて捉え、単純な知覚処理、スポーツ、高次認知活動の異なる枠組みから、（１）無意識的知覚と運動反応、（２）スポーツ課題にみられる無意識性、（３）選好判断・意思決定と脳活動、に言及した。

（１）無意識的知覚と運動反応については、我々（2002、2012）の逆向マスクング条件下の体性感覚・視覚反応時間課題による実験研究を紹介し、意識化できない知覚刺激が運動反応を早めることを示した。さらに渡辺（2008）の「速度の感染」に言及し、人の速い動きを見たあとでは単純反応時間が短くなることを紹介した。これらは、実験室的な統制のもとでの無意識的知覚による運動反応促進効果を示すものである。

（２）スポーツ課題の無意識性については、Mastersら（2009）の無意識的フィードバックによる運動学習実験からの知見を紹介した。この研究は、ゴルフパット練習でパットの結果を（逆向マスクングにより）意識化できないようにしてフィードバックした場合でもパット成功率が徐々に向上した、というものである。さらにMastersら（2007）は、サッカーのペナルティーキックでキーパーの立ち位置が左右に僅かに偏倚したとき、キッカーはその偏りを識別できないにもかかわらずその僅かに広い方のスペースに蹴る確率が高かった、と報告している。

このように、無意識的知覚はスポーツ課題においても無視できない影響を及ぼすことがわかる。

（３）選好判断・意思決定については、高橋・渡辺（2008）の選好判断と視線行動の研究をとりあげ、興味あるものの選択は対象物を見た直後に無意識的に決定され、そのあとで意識的に理由付けが行われることを紹介した。さらにAmemiya（学会発表、2012）の動物実験によれば、行動選択における試行錯誤は脳前頭皮質（理性脳）が行い、最終決断は扁桃体（情動脳）が行うということである。これらの知見は、行為・行動の意思決定は必ずしも意識的ではなくむしろ無意識的に行われること、またその背景では情動脳が重要な役割を果たすことを示唆している。

以上3つの観点から、我々の運動行動には無意識的過程が少なからず関与しており、知覚処理だけではなくスポーツ課題や選好判断・意思決定においても、無意識的過程の影響が予想以上に大きいことを紹介した。講演後、思いがけず多くの質問をいただき、無意識の問題は、今後、スポーツ心理学の幅広い分野に応用・発展していくかもしれない、という期待・予感を改めて感じさせられた。



演者：今中國泰先生（首都大学東京）

傍聴記 知覚・認知と運動行動における無意識性を傍聴して

中本浩揮（鹿屋体育大学）

今中國泰先生のキーノートレクチャーは、今回の学会で一番楽しみにしていたため少し早めに会場についた。その理由は、無意識性と知覚-運動制御を長年研究されてきた今中先生の考えをダイレクトに聴ける数少ないチャンスであるということと同時に、どちらかといえば意識性を対象に研究してきた自分自身が、運動行動において無意識の役割が想像以上に大きいことをやっと体感し始めたからである。そのため、簡単には測定することのできない無意識をどのように研究されてきたのか、また、無意識的研究の今後の方向性についてどのように考えられているのかを聞きたいと思い参加させていただいた。

レクチャーではまず今中先生が対象とされている無意識は、前注意の段階、つまり努力や注意で意識化可能な心の領域であることが説明され、その後、先生の研究チームや共同研究者であるMasters氏の研究を紹介しながら、3つの大きなテーマについてご講義された。

1つ目のテーマは、無意識的知覚と運動反応についてであり、逆行マスキングを使った実験が紹介された。逆行マスキングとは、閾値付近の弱い刺激を呈示した直後に、閾値上の強い刺激を与える方法で、弱い刺激が後続する強い刺激にマスクされ、意識として知覚されなくなるというものである。この際の刺激に対する反応時間は、弱い刺激、強い刺激がそれぞれ単独で呈示された場合に比べて短くなることが報告された。つまり、本人が感じていない体性感覚や視覚が反応を促進するということである。スポーツ場面において、熟練競技者が何を重要な刺激として意識的に知覚しているかを研究していた自分にとって、このデータは、いくら意識的な知覚情報を同定しても熟練者の優れた知覚-運動制御の本質的理解に至らないのだなあと不安を感じるものであった。

2つ目は、スポーツ課題に見られる無意識性で、

ゴルフパッティングの学習に必要なフィードバック情報をマスキングしても学習が成立してしまうというものであった。意識的なフィードバックに比べ学習効果そのものは小さいが、無意識的な運動学習のメリットは、あがり場面での実力発揮などで示されている。そのため、一般的に現場で行われる意識的な学習に対して疑問を投げかけるものであると感じた。また、サッカーのペナルティーキックにおいて、キッカーは無意識にキーパーの位置を知覚し、空間的に広い方に蹴ってしまうということであった。逆説的に考えれば、実はこういった他者の無意識の操作を熟練者は意識的に行っているのではないかと感じた。「気づいていたらやられていた。」は、意識と無意識の間隙をつかれた結果なのだろう。

3つ目は、我々が普段行っている意思決定も潜在的に決定されているということであった。ラットの学習中の扁桃体の活動を記録した研究から、試行錯誤は脳皮質、決断は情動という結果は非常に興味深く拝聴させていただいた。後になって冷静に考えたとき「しまった」ということが多いのは、その場の情動にまかせた意思決定の結果だろう。よくスポーツ現場で「hot heart, cool mind」といわれるが、これはそもそも我々の仕組み的に難しいのだなと感じた。

レクチャーを聞いて、潜在性研究のおもしろさやスポーツ心理学の現場に対する意義を心底感じる事ができた。このような貴重なレクチャーを今後の自身の研究活動に活かしたい。また、スライドがとてもわかりやすく、すべての人がわかるように説明するというスタイルも見習いたいと感じた。

「チーム力の育成」 司会報告

土屋裕睦（大阪体育大学）

ロンドンオリンピック（2012年）も終盤を迎えた8月10日、産経新聞の一面に「日本『絆』の力・団体種目躍進」の文字が躍った。史上最多38個のメダルを獲得したこの大会では、サッカー（女子）、バレーボール（女子）等、チームスポーツの活躍が目立った。それに加え、卓球（女子団体）やフェンシング（団体）のように、個人ではメダルに届かなくても、「チーム」として力を発揮する姿が、東日本大震災を経験した日本を元気づけた。筆者はこの取材に対して集団凝集性と集合的効力感の視点から「絆」の力を論じたが、他に取材に応えた競技関係者も同様に「チーム力」を日本選手躍進の要因に挙げていた。本シンポジウムは、この「チーム力」について体育学から迫ろうとする試みであった。

上述の趣旨説明の後、元サッカーU-17日本代表監督である松田保先生からは、コーチングの事例をご報告いただいた。競技現場における「チーム力」の実態を知ることがねらいであった。松田先生は日本サッカーの歴史からご紹介頂き、様々な年代の日本代表チームがどのように世界と戦ってきたのかを解説していただいた。そこでは、選手に施したメンタルトレーニングの内容や、チームワークを決定づける「ディスプリン」について具体的な出来事やエピソードを交えながらご報告頂いた。これらの経験をもとに、「個の人間力がチームの器を決める」とし、「オーケストラ的チームワーク」の大切さをご披露いただいた。

続いて体育・スポーツ心理学がご専門の遠藤俊郎先生からは、スポーツ集団におけるチーム力をどのように捉えるのかについて最近の研究をレビューしていただき、その中で注目すべき理論として「チームワークモデル」をご紹介いただいた。このモデルでは、チーム力にはレベルが存在すると仮定し、課題の特性によりチーム活動が異なると考えられていた。先生は長くバレーボールにおいてメンタルサポ

ート等の経験があり、「チーム力は単なる個人の能力の総和ではない」との主張には、多くのフロアーの先生方が頷いていらしかった。

最後に、組織心理学がご専門の山浦一保先生からはチームのダイナミクスやアクションリサーチについて話題提供をいただいた。先生はチーム力を「メンバー間・内に集合的効力感を醸成し、実現させる力の程度」と定義づけ、関係性やチームのベクトル合わせ（集団目標の設定）の重要性を説かれた。その上で、実際のスポーツチームにおけるプロセス・コンサルテーションの事例を紹介していただいた。これはスポーツチームのチーム力をいかに育成するかという課題に対して、具体的なイメージで応えるご報告であった。

3名のシンポジストのご報告の後に、体育心理学がご専門で動機づけ研究を行っている西田保先生より指定討論をいただいた。このシンポジウムが体育学における「チーム力」研究のキックオフの場であるなら、今後どのような研究が必要になるのか、について課題を整理していただいた。すなわち、チーム力の定義のあり方、研究の方向性、性差・文化差等、このテーマの下には、私たちの知的好奇心を刺激する魅力的な課題がたくさんあることを確認した。次年度以降この指定討論を踏まえ、さらに多くの研究者や実践家の「チーム力」を結集し、このテーマを掘り下げていただけることを願っている。



司会者、演者、指定討論者の先生方

「チーム力の育成」コーチングの事例から

松田 保（びわこ成蹊スポーツ大学）

名古屋大学の西田先生のご縁で、大変貴重な発表の機会を頂き感謝しております。チーム力の育成について、20年前に私が監督として率いたサッカー（U-15・16・17）日本代表チームのコーチングの事例を、時代背景とメンタルトレーニングの導入、ディスプリンの徹底、そして自身が目標としたオーケストラ的チームワークについて発表します。

時代背景・極東から世界へ

男子1936年ベルリンオリンピックから2014年ブラジルW-CUPまでと、女子1991年中国W-CUPから2012年ロンドンオリンピックまでの世界大会出場の歴史を簡単に説明する。

1960年D・クラマー日本代表コーチの招聘、1968年メキシコオリンピック銅メダルとクラマーの提言から50数年の成果が、今日の日本サッカーを極東から世界スタンダードに成長させた。サムライブルーはW-CUP 5大会連続出場を果たし、なでしこジャパンは2011年東日本大震災復興再生の使命の下ドイツW-CUPで優勝し、2012年ロンドンオリンピックで銀メダルを獲得した。

1993年Jリーグが開幕しドーハの悲劇の直後、U-15日本代表チームを立ち上げる。アジア予選優勝、世界大会ベスト4、世界スタンダードの選手の育成を目標に掲げ、海外遠征を多くして世界を視野に入れた選手の育成とチームづくりを進めた。1994年アジア最終予選では、勝負所ほど粘り強くチームが一丸となって戦い、2連敗の逆境を跳ね返し2連勝して予選リーグを突破、接戦の準決・決勝も延長Vゴールで勝ち初優勝・フェアプレー賞を獲得した。1995年のU-17世界大会では、世界の強豪国を転戦強化し、世界ベスト4に挑んだが、地元エクアドルにアウェイの洗礼を受け得失点差で予選リーグ惜敗、次に繋がる世界スタンダード（俯瞰）の貴重な経験を積んだ。

メンタルトレーニングの導入

個の自立とチーム力の育成を効果的に促すためにメンタルトレーニングが重要と捉え、メンタルコーチ（豊田一成・当時滋賀大学教授）を

スタッフに迎えた。Jリーグ元年とドーハの悲劇を目の当たりにした選手たちの多くが「プロサッカー選手になる・日本代表選手になってW-CUPに出場する」と高い目標を設定していた。高い志・使命感とメンタルトレーニングは、仲間を受け入れフェアに協働するオーケストラ的チームワークを育みチーム力の向上に相乗的な効果をもたらした。

ディスプリンの徹底（クラマー、オフトの教え）

個を組織化するための約束事であるディスプリンは、全員守備の徹底を図り、攻守の切り替えの早さ・判断の速さを勝負のポイントとし、チームワークのベースとしてイメージトレーニングの中でも実戦の中でも繰り返し徹底追求した。ディスプリンの徹底はインサイト（状況判断・洞察力）の判断基準と優先順位を明確にし、コミュニケーション力を高め、勝つためのチームスタイルを確立した。日々の生活の中でも、良い環境・習慣づくりのためのディスプリンを定着させ、オンザピッチとオフザピッチは繋がっていることを選手たちに理解させた。

オーケストラ的チームワーク（近江達・枚方FC創設者）

メンタルトレーニングとチームディスプリンの定着は自立した強く逞しいクリエイティブな選手とチーム力の育成に大きな成果をもたらした。個が自立し、個と個の融合・協働であるオーケストラ的チームワークを生み出し「友情は最高の戦術」（クラマー・岡野俊一郎）と言われるような強い絆と連帯で個が結ばれ、フォアザフラッグの使命の下、そのハーモニーはやがて黄金世代を生み出し、世界スタンダードのオリジナル（自発創造）を追及する段階へと発展した。

このような発表と学びの機会を与えて下さった専門領域学会大会委員の皆様とご清聴頂いたフロアーの皆様にご心から御礼申し上げます。

「チーム力の育成」：スポーツにおける「チーム力」とは？

遠藤俊郎（大東文化大学）

1. シンポジストを引き受けて

クリスマスメールならぬシンポジスト依頼のメールが土屋先生から届いたのは年の瀬も押し迫った2012年12月21日であった。直接「チーム力」に関わる研究を行っている訳でもないのに、筆者以外にもっと適任者がいるのでは？と思いながらも、これまでもメンタルサポートの経験もあるバレーボールを例にとって現場を念頭においての発表で良い、という土屋先生の優しい言葉で引き受けることにした。しかし、シンポジウム当日までの道のりはそう簡単ではなかった。というのは、「チーム力」という用語は、チームにおけるパフォーマンス発揮の際にこれまでも一般的に使用され、辞典的にも、チームの組織力、団結力、結束力といった意味合いで用いられてきたと思われる。ところが今回改めて「チーム力」とは何か？を考えたときに、あまりにも身近で慣用的に使用してきた経緯と共に、体育・スポーツ心理学的側面から直接「チーム力」そのものを扱った研究がほぼ皆無に近かったこともあって論の展開に苦慮せざるを得なかった。しかし、何とか一応発表の責を果たすことができたのは、筆者の不足分を補って余りある、司会者の土屋先生、指定討論者の西田先生、また、演者の松田、山浦両先生方、さらには様々ご意見等を頂戴したフロアーの方々、といったそれこそ「チーム力」のお蔭と衷心より感謝申し上げたい。以下に発表の概略を述べるが、拙いものであった筆者の発表が、特にスポーツ競技場面における「チーム力」を考える今後のきっかけを提示できたとしたらこの上ない喜びである。

2. 2012ロンドン五輪で発揮されたチーム力とは？

2012ロンドン五輪において日本女子バレーボールチームは、実に28年ぶりとなる銅メダルを獲得した。韓国との銅メダルマッチ直後のメディアのインタビューでの眞鍋監督の主なコメントからは、「データに基づいた総力戦」、「心理的結束の表れ」、「指導も作戦立案も共同」、等の日本女子バレーボールチームにおける「チーム力」の発揮に関連したキーワードが浮かび上がっていた。また、「ロンドン五輪、日本勢で最も“チーム力”を感じた競技は？」という雑誌 (<http://number.bunshun.jp/>) のアンケートでも、質問に際して「結束力」、「コンビネーション」といったワードが提示され、競泳男子400m

リレーチームやなでしこジャパン、女子バレーボールの各チームが上位に挙げられていた。このようなワード（特に下線部）は、これまでスポーツの競技現場における「チーム力」の捉えられ方の一側面を示唆していると思われる。

3. 「チーム力」をどう考えるか？

一般的にスポーツ現場における「チーム力」を考える際には、技術的、心理的、体力的、戦術的、マネジメント、等の観点から「チームの総合力」といった捉え方が優位かもしれない。また、スポーツ心理学的には、これまで、凝集性、成員性、魅力、モラル、効力感、規範、斉一性、リーダーシップ、チームワーク、等の観点からスポーツ集団研究としてチームを扱ってきた経緯がある。また、英語表記に関しても、team competency, the power of team, team's power (team power), team effectivenessといった記述がみられるが、必ずしも統一的なものではなかった。そこでここでは、「チーム力」とは「環境や課題の変化に適応しながら、成果に直結させるのできるチームレベルの能力」というチームワークモデルを拡張した池田・古川（2009）の考え方を参照した。また、①チームが取り組む課題の特性、②必要なチームメンバー間の役割の範囲（役割内と役割外行動）と相互作用の特性、③求められるチーム活動の観点、といった側面から分析するとチーム力に1から3までのレベル差が存在することを指摘し、さらに、その考え方を反映した5下位尺度32項目からなる「チーム力尺度」を紹介した。

4. まとめに代えて

最後に、以下のことを指摘して筆者の発表のまとめに代え、次代の研究者たちの「チーム力」研究の取り組みに期待したい。

- ①チーム力は単なる個人の能力等の総和ではない。
- ②チームにおけるチーム力も、形成過程においてそのレベルは変化する。
- ③チームにおけるチーム力は、チームの置かれた状況によって、また、必要とされるレベルによって発揮されるチーム力が異なる。
- ④チーム力は、チーム経験として学習される。
- ⑤チーム力については今後継続的な論議が求められる。

“チーム力”をリーダーシップ研究における“関係性モデル”から考える

山浦一保（立命館大学）

チームのマネジメントに、リーダーシップが重要であることは多くの研究で報告されている。また、近接の研究テーマ（例えば、動機づけやソーシャル・サポート、集団凝集性や規範、目標設定と共有に関する研究など）でも、コーチと選手との関係性（以下、関係性）を効果的に築くことがいかに重要であるかは、たびたび指摘されているところである。しかしながら、関係性そのものに重点を置き、チーム・集団現象を理解しようとする動きは比較的最近になってのことである（Jowett & Cooclerill, 2002）。

まず、リーダーシップ研究の最近の動向と「関係性」の位置づけを示すとともに、関係性に着眼してリーダーシップ研究を行うことになったきっかけについて、自己決定理論（Deci & Ryan, 1985）をはじめ、筆者ら（山浦・堀下・金山, 2013）の知見を紹介した。これらの理論や知見から、関係性からのアプローチは、リーダーシップがなぜ有効に機能する／しないのかを説明しうることが示唆された。そこで、この視点で行った2つの研究を引き続き紹介した。

なお、本発表では、Salas et al. (1992) によるチームの定義を援用し、“所属する期間に期限がある中で、共通の目標や目的の達成に向けて、2名以上のメンバーたちが相互依存的かつ適応的に影響を及ぼし合う集合”と定義した。また、“そのメンバーたちどうしの協働を通して、目標を実現させることができる（という認知が共有されている）”程度をチーム力（の強さ）と捉え、いわゆる集会的効力感をその指標とした。

研究1は、指導者と選手（キャプテン）との間で関係性の質が低下し、その影響を受けて客観的パフォーマンスが伸び悩んでいたチームの事例を紹介した。これは、一連のプロセスにおいて、指導者とキャプテン、その他の選手が陥った心理状態やチームの動機づけ雰囲気の様相について、定性的、定量的

な手法を縦断的に用いて検討したものであった。

研究2では、目標を実現できるという認知の共有度としてのチーム力が、いかにすれば生み出されるのか、すなわち、通常時とプレッシャー時の局面での集会的効力感を高める要因は何かについての分析を進めた。そして、研究1での知見をもとに、着目すべき3つの要因との関連分析を行った。これら3つとは、「指導者と選手の関係性」、「選手どうし（レギュラー層とそれ以外）の関係性」、そして当該チームで実現させようとしている「目標の意識化」の程度であった。その結果、競技レベルの低いチームよりも高いチームの方が、これら3つの得点は有意に高いこと、とくに、2つの局面で測定した集会的効力感に、目標の意識化がより強く寄与することが示された。

このシンポジウムで頂いた機会と先生方の貴重なご教示を踏まえて、今後も“チーム力”の育成、およびリーダーシップがなぜ受容・拒否されるのかについて、関係性の観点から探っていきたいと考えている。とくに、和を尊ぶ日本の文化ならではのチーム力のあり方やその育成方法に関わるご示唆を頂いたことは、これからの指針の一つにしたい。

傍聴記

内田遼介（大阪大学大学院）

冒頭、司会である土屋裕睦先生から「これからのチーム力に関する研究のキックオフになればとの想いで本シンポジウムを開催した」との趣旨説明がなされた。この趣旨説明のとおり、これからのチーム力に関する研究の方向性を示すような3名のシンポジストの発表、ならびに示唆に富む意見がフロアからなされ、大変興味深く拝聴した。

まず、松田保先生がコーチングの観点から、チーム力を発揮するに当たって重要な事柄についてなでしこジャパンの成功例を示しながら説明された。特にチーム力を発揮するにあたって重要な事柄として個を生かし組織化するためのディシプリン（規律、優先順位、コンセプトなど）の重要性について説かれていたのが印象に残った。

次に、遠藤俊郎先生がスポーツ心理学の観点から、スポーツ集団におけるチーム力をどのように捉えるのかについて特に池田・古川（2009）の議論を参考に説明された。「チーム力は単なる個人の能力の総和ではない」との考え方は非常に共感できる一方で、チーム力を測定することの難しさを表しているようにも感じられた。

最後の登壇者は、主に産業・組織心理学領域においてご活躍されている山浦一保先生であった。山浦先生は日本発の理論である三隅二不二先生のPM理論の考え方を汲んだ研究者であり、リーダーシップの「関係性モデル」の観点からチーム力を捉える試みについて説明された。特に上司一部下間の事前の関係性が部下に対するフィードバックの効果に影響を及ぼすという山浦先生の直近の研究成果（山浦ほか、2013、心理学研究）はスポーツ集団のチーム力を育成する際の手がかりになるように思われた。

引き続き行われた西田保先生による指定討論では主に①チーム力の定義、②チーム力の測定方法、③チーム力の性差、文化差などについて指摘があった。これらの点についてはこれから多くの研究者によっ

て議論を重ねる必要があるように感じられた。

最後にフロアにいらっしゃった吉川政夫先生、阿江美恵子先生、丹羽劭昭先生の3名の先生方から意見が述べられた。なかでも丹羽先生の「チーム力を操作的に定義したうえで仮説検証型の実験室実験もおこなうべき」との意見は私自身非常に共感できるものであった。

今回のシンポジウムでは主に社会心理学の観点に則った「チーム力」について議論されていたように感じられた。私は「チーム力」と密接に関連すると思われる集会的効力感の評価過程に着目して研究を行っているが、概念定義と測定方法が一致しているのかよく指摘される。今回議論されていた「チーム力」も心理学的な構成概念である以上、明確な概念定義のもとで研究をした方が良いように感じられた。

座長報告

筒井清次郎（愛知教育大学）

学会大会における最初のプログラムとして、口頭発表が2会場同時に始まった。第1会場は、運動学習・制御に関する4演題であった。

最初は、「バスケットボールの1対1の状況においてドリブラーを止めるには？」という演題で、藤井慶輔さん（京都大学大学院、日本学術振興会）が発表された。防御者の成功試行では、キネマティックな（映像学的）分析から、動作開始が早いことと、動作遂行が速いことを明らかにし、その後のキネマティックな（力学的）分析から、地面反力が小さいことを報告された。スポーツ指導現場への提言にもなっており、スポーツ経験者ならではの研究視点が見受けられた。これらの一連の研究をまとめて、学位を申請されるようである。

2人目は、「2連結振動子モデルによる競合ダイナミクスの理解」という演題で、山本裕二先生（名古屋大学）が発表された。剣道やタグを取り合う鬼ごっこといった2者間の競合状況において、両者の距離によって、イベントの発生が説明できることを報告された。ともすれば複雑に見える事象が、特定の変数に気づくことによって、意外と単純なふるまいに収束することを示している。山本先生のグループは、近年、これら一連の研究を国際誌に掲載され続けている。

3人目は、「リスク化の一致タイミング課題遂行における運動調整方略」という演題で、太田啓示さん（東京大学大学院）が発表された。目標に近い方が高得点ではあるが、目標を超えると無得点になる課題において、人はどのような運動調整を試みるのかという、行動経済学の理論をスポーツに援用したものである。その結果、参加者は計算上の最適値よりも目標に近い方略をとり、自己の遂行を過大評価していることが報告された。その際に個人差があることも報告されており、その個人差の原因に興味を持たれる。

最後は、「サッカープレーヤーの視覚探索方略ーパスレシーブ局面に着目してー」という演題で、夏原隆之さん（筑波大学大学院）が発表された。大型スクリーンに映し出された映像から、瞬時にどこにパスを出すのかを判断し、パスを出させる課題を、技能別に比較したもので、眼球運動の停留時間等を報告された。夏原さんはサッカーにおける状況判断に関する研究を継続されており、そのうちの 하나가2013年度のスポーツ心理学会奨励賞に選考された。

以上の4題は、いずれもスポーツ課題を扱っており、なおかつ、非常に高レベルの研究であった。フロアーからも、進矢さん（東京大学大学院）や今中先生（首都大学東京）を始め、多くの質問が活発に行われ、座長からも質問したいことがあったけれど、その時間も取れないほどの盛況であった。

座長報告

磯貝浩久（九州工業大学）

大会初日の8月28日に行なわれた、4演題の口頭発表の座長を務めましたのでご報告します。最初の発表は、順天堂大学の町田萌先生による「未来のスポーツ指導者を育成するー学生のスポーツ指導への自信を育てるには？ー」でした。学生のスポーツ指導への自信をコーチング効力感という概念を基に評価して、コーチング効力感の情報源（競技年数、指導歴、学年、同性から指導を受けた経験）の影響を検討し、スポーツ指導への興味との関係を含めた仮説モデルを提示されました。分析結果では学年を除く情報源の影響が認められ、モデルも適合していたとのことでした。対象者数も多く、多母集団同時分析などの統計処理も行なわれるなどしっかりした研究であると感じました。コーチング効力感に関する研究は、日本では始められたばかりですので、今後さらに研究を推進されることを期待します。個人的には、どのようなコーチング体験が効力感に結びつくのかといった体験の質の検討や、コーチング効力感が様々なパフォーマンスにどのように影響するのかといった検討も面白いと思いました。

2題目の発表は、野口将秀先生（京都大学大学院）による「高等学校男子バレーボール指導者の包括的コーチング・メンタルモデルに関する研究ー指導観に関する語りの事例的提示ー」でした。ご発表ではまずご自分の経歴を話され、質問紙などの量的研究の限界について指摘され、そしてグランデット・セオリー・アプローチを用いて明らかにされたコーチング・メンタルモデルについて説明されました。フロアから発話の概念化やカテゴリー化の妥当性に関する疑問が出されました。質的な研究を行うには熟練を要し大変なことだと思いますが、引き続き研究を進められ、より質の高い質的研究を行われることに期待しております。

3題目は、朝西知徳先生（羽衣国際大学）による「学生野球における監督の発する言葉の影響力につ

いてーなぜ大逆転劇は生まれたのかー」でした。ご自身の長年の野球監督経験を基に、試合中に発せられた具体的な言葉と、その後の選手の変化と試合結果の関係についての数多くの事例を発表されました。「我慢すれば終盤に必ず何かが起こる」といった力強い言葉も熱く紹介され、まるで講演を聴いているような感じを受けました。フロアから一般化に関する質問が出されましたが、どのような言葉が影響するのかをカテゴリーに分類したり、どのように影響するのかというプロセスを検討したりされると研究としてよりまとまるのではないかと感じました。

4題目の発表は、関口遵先生（日本体育大学）による「大学院コーチ教育プログラムにおける大学院生コーチの学習の場」でした。発表者ご自身の大学院のコーチ教育プログラムを対象として、どのような学習の場と捉えられているかについてグランデット・セオリー・アプローチを用いて検討された内容のご発表でした。大学院生コーチにとっては、プログラム中の学びの環境は、フォーマルとインフォーマルに分類され、それぞれの場でのディスカッションが学びとして評価されていることなどが報告されました。体育系大学の先生からその大学での取り組みなどを踏まえた意見が出され、どのような学習の場の提供が望まれるかなどに関して議論が深められたと感じています。最後に、大会初日の朝一番の時間帯にも関わらず、多くの先生方に参加して頂いたことに感謝いたします。

座長報告

北村勝朗（東北大学）

3名の発表者による本セッションの発表は、トップコーチ、トップ選手、そして育成というキーワードが共通したものであった。すなわち本セッションは、①どのようなスキルを身につけることが優れた選手育成や選手のキャリア形成につながるのか、②そのためにどのように指導法を見直せばよいのか、③更にはそうした優れたアスリートを育てることによってどのようにスポーツの価値を高められるのか、といった点に焦点を当てた共通の議論が展開されるセッションであった。

最初の発表は、仙台大学大学院の徳江郁美氏による「トップコーチから見た競技者のスポーツに関連する知的能力の構造について」であった。「心技体」には含めることができないトップアスリートの能力を「知的能力」と捉え、この「知的能力」の構造解明を目的とした調査結果が報告された。トップコーチ125名を対象としたアンケート調査により、「ヒューマンスキル」「コンセプチュアルスキル」「リーダーシップ」の3因子によって「知的能力」が構成されている点が導き出されていた。フロアからは、得られた結果の解釈やより立ち入った分析に関する質問が出されており、今後の研究を進める上で重要な示唆が得られたと考えられる。

2番目の発表は、仙台大学大学院の矢部恭平氏による「スポーツ選手の知的能力と生きる力の関連性について」であった。トップアスリートのもつ「知的能力」の解明と、こうした「知的能力」と新学習指導要領で示されている「生きる力」との関連性に焦点を当てた調査結果について報告がなされた。トップレベル指導者125名を対象とした2種類の調査（スポーツ選手の知的能力、及び日常生活スキル尺度）により、スポーツで培われた知的能力と生きる力を構成する因子との間に相関がある点が示された。本セッションの共通テーマである「優れた選手育成」の視点から本研究を捉えた時、「知的能力」の

定義や解釈が重要な役割を担うと考えられる。その点について、より具体的なワークショップ等の活動内容や状況についての情報提供があればより立ち入った議論が展開されたと考えられる。今後の研究の発展が期待される。

3番目の発表は、日本レスリング協会メダルポテンシャルアスリート育成システム構築事業の清水聖志人氏による「大学生トップレベル競技者におけるキャリア形成プログラム作成に向けた縦断的検討」であった。トップレベルの大学生男子レスリング競技者26名を対象とし、2年間に渡る縦断的調査結果について報告がなされた。ライフスキルに関する評価尺度を用いて実施された調査結果から、「目標設定」スキルの獲得レベルが向上し続けている点が報告され、キャリア形成プログラムにおける「目標設定」スキルの獲得の重要性が示された。フロアからは、「キャリア形成」の捉え方についていくつか質問が出され、就職のみならずトップレベル選手の育成の全体像の中でのキャリアの位置づけの重要性について議論がなれた。本研究の今後の発展における重要な示唆が得られたと考える。

以上3つの発表を通し、フロアからは活発な質問やコメントが出された。質疑応答を通し、本セッションの共通テーマである「優れたアスリート育成」の研究は様々なレベルの選手及び指導者育成において重要な意味を持つ点が確認された。フロアの先生方からの示唆に富むご発言と発表者の真摯な姿勢に感謝したい。

座長報告

土屋裕睦（大阪体育大学）

私は座長として、以下の3演題を担当させていた。最初の演者は持田和明先生で、演題は「大学サッカー競技における選手個々のライフスキルとチームの集団凝集性・集団効力感との関連性の検討」であった。持田先生は、兵庫教育大学大学院にて島本好平先生のもとに学び、修士修了後は神戸大学博士課程に進学し、高見和至先生のもとで博士号取得に挑戦されている。最近では関西体育心理例会等でも積極的にご発表をなさっている新進気鋭の研究者である。今回は大学サッカー選手を対象に、集団凝集性・集団効力感の先行要因として、選手個々の能力・スキルに着目されていた。コミュニケーションスキルがいずれにも重要であること、さらに集団凝集性には「謙虚な心」が、集合的効力感には「責任ある行動」が寄与している可能性の強いことが示された。フロアーからは実際の指導場面において、たとえば「チームのために自己犠牲ができない選手をどう指導するのか」といった話題も投げかけられ、競技の現場を刺激する実践的な研究発表であった。

2演題目は、水野基樹先生による、「体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象とした入学前教育の導入効果—プログラム体験後の心理的変容の視点から」であった。水野先生は順天堂大学の大学院で研究指導を担当されながら、ご専門の組織開発の知識・技術を用いて、さまざまな分野において実践研究をなさっている。とりわけアスリートを対象としたチームビルディングにも優れた実践があり、北森義明先生のご後継として組織開発技法をスポーツ集団に適用するトップランナーである。今回はこの知識・技法を入学前教育に活用し、さらにその効果を量的にも質的にも検討しようとした意欲的な研究であり、プログラムではたとえば入学前の高校生に、「4年後の自分はようになっていたいか？」と問いかけるなど、言うなれば「リメディアル教育のスポーツ心理学版」とでも言うべき興味深い取り組み

であった。共同研究者を見ると、学部長の野川春夫先生のお名前もあり、単に水野先生個人の研究上の関心だけでなく、ファカルティ全般の関心にも合致した実践であることが垣間見える。効果測定では、自作のアンケート調査に加え、自由記述の内容も吟味されており、概ね肯定的な変化を認めていた。今後、彼らへの追跡調査を行うとのことであったので、その結果が楽しみである。

最後の演者は平山健三先生（法政大学大学院）であった。平山先生は大学職員としてのご経歴もあり、学生アスリートのキャリア意識、アイデンティティの問題は、大学職員という立場からはどのように見えるのか、大変興味深く拝聴した。平山先生は、ラグビートップリーグに所属するアスリートを対象に質問紙調査を実施し、早期完了型アイデンティティ（foreclosure）に関連する要因（たとえば進学先の専攻志望度の低さ、他）を浮き彫りにしていた。運動部強化担当の立場からすれば、ともすれば「あれこれ将来のことなど考えず、今はラグビーのことだけ考えて打ち込んでいけば良い」といった短絡な発想があるかもしれないが、アスリートの人生全般のキャリア発達を考えた場合、早期完了型アイデンティティの弊害が小さくないことを、改めて痛感させられるディスカッションであった。

さて、3つの演題全体を通じて、いずれも研究として完成度の高い発表であったと感じた。すなわち、目的の明確さ、方法論の適切性、分析の妥当性、考察の整合性など、「研究の条件」が満たされた発表であった。質疑応答の様子を見ても、演者の先生方の主張が、フロアーの先生方にとっても、おおよそ理解できるものであったからこそ、内容や意義を掘り下げるような議論が活発になされたのだと思う。体育心理学専門領域では、研究発表のエントリーにあたって審査はないが、このような「研究の条件」の整った発表を続けていくことは、体育学会全体の発展にとっても重要なことであると考えている。

座長報告

永山貴洋（石巻専修大学）

大会2日目の口頭発表5の座長を担当させていただきましたので、ご報告させていただきます。9時30分開始ということもあり、ご参加いただいた先生は、初日に比べやや少なめの30名ほどでした。本セッションにて発表されたのは、山本浩二先生（神戸医療福祉大学）、西田順一先生（群馬大学）、そして上地広昭先生（山口大学）の3名の先生方でした。発表時間は15分で、その後5分間の質疑応答の時間が設けられました。尚、質疑応答は、演題ごとに行いました。

まず、山本先生の「中学校柔道授業における学習達成度のパターンをもとにした生徒の類型化」は、中学校柔道授業を良い授業にすることを目指し、生徒の学習達成度を評価する尺度を開発すること、その尺度をもとに生徒を類型化することを目的としたものでした。発表では、柔道授業を受けた中学生男女445名を対象とした調査結果から、柔道授業の学習達成度を評価するものとして「自他への気づき」、「規範遵守」、「柔道学習の理解」、及び「伝統的行動志向」の4因子が抽出されたこと、そして柔道授業を受けた中学生を類型化する上で、「規範遵守」の側面が重要であることが報告されました。質疑応答の際には、座長の立場から良い授業を構築することと、学習達成度を評価する尺度を開発することの関連について質問させていただきました。

次の西田先生による「活動場面から捉えた小学校教員の身体活動とメンタルヘルスとの関連一性差に着目した分析」は、小学校教員を対象として、仕事、移動、家事、そしてレジャーの4つの活動場面別の身体活動量とメンタルヘルスの関連を性により検討することを目的としたものでした。発表では、公立小学校の常勤教員452名を対象としてGHQ28およびIPAQを実施した結果、小学校教員のメンタルヘルスに影響する身体活動場面や強度には性差が存在する可能性があることが報告されました。発表後

の質疑応答では、発表の中で紹介された研究成果と先行研究の相違点について活発な意見交換が行われました。

最後に、上地先生により、スマートフォン用のアプリケーションを活用した身体活動増強介入「Active Lifestyle Campaign」の介入効果を検証した「スマートフォンによる身体活動増強介入の効果」について発表されました。発表では、歩数測定、セルフモニタリング、SNS、そして行動変容メッセージなどのアプリケーションの機能と介入方法について説明された後、大学生を対象として実施された介入効果の検証結果について報告されました。今回の報告では、アプリケーションの十分な介入効果が認められなかったとのことでしたが、身近なスマートフォンを活用してアウトリーチを広げることが目的の1つにあげられており、今後の発展が期待される興味深い発表内容でした。質疑応答では、介入効果が認められなかった原因について意見交換がなされ、現在のところ介入効果が認められなかった原因として調査期間と試験期間が重なったことが原因と考えられることが上地先生より説明されました。

発表された先生方には、拙い進行によりご迷惑をおかけしました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。また、進行をサポートしていただいた会場係の皆様、ご参加いただいたフロアの先生方、発表された3名の先生方、そして貴重な機会を与えていただいたことにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

座長報告

島本好平（兵庫教育大学）

私が担当しましたセッションでは実践的な事例報告、調査研究、実験研究の3つの発表が行われました。以下に、各発表の概要と主な質疑応答を簡潔に記させていただきます。

最初の発表は、東洋英和女学院大学の西 洋子先生による「身体的共創から社会的共創へ①ことばが生まれるとき」でした。西先生は2012年4月より東日本大震災の被災地域において、「手合せ表現」を主活動とする創造的な身体表現のワークショップを月1回の割合で開催されています。今回は2012年12月より継続されている東松島市での活動を報告されました。報告では被災経験を抱える発達障害児の変化の様子が実際の記録映像とともに提示され、ワークショップでの身体的なかかわりを通じて「ことば」のはたらきが生まれる瞬間を事例的に検討されている大変興味深いものでした。発表後の質疑応答では、対象となった児童のプライバシーの保護について活発な意見交換がなされました。ことばが生まれるリアルな瞬間を提示する意義を重視するのか、学会発表の場への配慮を重視するのか、研究発表のあり方に関する難しい選択であると感じました。

2番目の発表は、大阪体育大学の山田裕生先生による「大学生競技者におけるセルフトーク」で、スポーツメンタルトレーニングにおける一般的な心理技法の1つである「セルフトーク」の使用実態に迫った研究発表でした。そこでは、使用実態の国際比較を行うため、海外で開発されたSelf-Talk Use Questionnaire (Hardy, 2005) を日本語に翻訳しデータを収集、分析・検討されていました。質疑応答では、海外の尺度を翻訳する際の手続きやその信頼性について、また、セルフトークの種類とパフォーマンス指標との関連性について質問が出されました。個人的な感想として、セルフトークの研究がこれから目指している方向性が併せて提示されることで、本研究の意義とその位置づけをより明確にすること

ができるのではないかと感じました。

そして、3番目の発表は、横浜国立大学の松村智也先生による「テニスにおける競技不安とその対応策に関する研究」でした。松村先生はテニスにおける対応策の1つである「身体的・環境的な対応策」に着目し、その対応策を行う実験を3ヶ月間、毎週1回30分ずつ実施した上で競技不安への影響を検証されていました。その結果、身体的ならびに環境的な対応策ともに、競技不安を減少させるという一定の効果が認められました。このことから、当該対応策が競技不安を減少させるためには、数か月間という長期的なトレーニングが必要であることを示唆されていました。質疑応答では、「研究で用いられた競技不安テスト (SCAT) は特定不安を測定するものではないのか、状態不安ではどうか」という質問が出されました。再び、個人的な感想ではありますが、「特性不安」に着目している理由やそのような不安に着目する意義に関する説明、そして、実験条件が定められた経緯が提示されることで、フロア側の研究に対する理解はより促進されるのではないかと思います。

筆者の各研究に対する理解不足の面もあるかもしれませんが、当日の様子が文面から少しでも読者の方々に伝われば幸いです。以上をもって座長報告とさせていただきます。最後に、このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

演者報告

村山孝之（金沢大学）

8月28日～30日にかけて、立命館大学にて日本体育学会第64回大会が開催されました。びわこ・くさつキャンパスへは初めて足を運びましたが、広大な土地に建つ立派な校舎、整備されたスポーツ施設、そして大学や大手企業を中心とした街づくりのすばらしさに感激したことを覚えております。うどん屋と回転寿司屋が多いのも意外でした。タクシーの運転手曰く、地元の方はせっかちなのですぐにできるものを好むのだそうです。学会の目的は当然のことながら研究活動がメインですが、開催地の特色を知り、味わうのも良いですね。

さて、今回、私は「プレッシャーが運動スキルの遂行に及ぼす影響 ―運動スキルの閉鎖・開放次元に着目して―」という題目で発表させていただきました。内容を要約すれば、“プレッシャー下では、種目特性によって異なる認知的変化（注意）、運動学的変化が生じる”というものになります。特に、クローズドスキルとオープンスキルのどちらも注意散漫は生じるがオープンでは運動の意識的处理が生じにくいこと、クローズドでもオープンでも運動の縮小が生じること、オープンの方は運動速度のばらつきが低下しやすいことを示しました。

ただし、個人的に悔しいのは、パフォーマンスが顕著に低下するほどの高強度のプレッシャーがかからなかったことです。決して珍しいことではないのですが、この研究は科研費の助成を頂いて行った研究の一部でもあったので、倫理的問題の生じない範囲内で「あがり」状況を可能な限り再現したいと思っておりました。この点はプレッシャー研究で常に課題とされます。負荷内容が良くないのか、私の偽教示が“胡散臭い”のかはわかりませんが、さらに良い方法を検討しなければなりません。実は、いくつか案もあるのですが……。その意味で、今回の発表を通じて対策の方向性を確認できましたし、多くのヒントを得ることができました。特に、東大の

大築先生、奈良女子大の星野先生、大阪府立大の吉井先生、鹿屋体育大の院生の方々など多くの方に質問していただき、様々な視点からディスカッションさせていただくことができました。貴重なご意見やご指摘をいただきました先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

最後に、体育学会で発表することの長所は、やはり近接領域の方々とも情報交換できる点であると思います。今回の発表では近接領域の数名の方にご質問いただきました。しかし、さらに多くの他領域の先生方ともディスカッションできればなお良かっただろうと感じています。研究者は「自分のアイディアを大事にし過ぎてしまいがち」と言われます。私は“これだ！”というアイディアを思いつくとすぐにメモしたり録音したりしていますが、周囲に言わせると、そういう時はどこか“ニヤニヤ”しているのだそうです。思いつきやひらめきに喜びを感じることは研究者としての一種の醍醐味かと思いますが、常に客観的な視点から自らの研究内容をチェックする姿勢を忘れないようにしたいと思っております。今回の発表を機に、今後も継続的に発表していきたいと思っております。客観的な視点を忘れてしまっているときには、先生方にぜひ厳しいご指導をいただければ幸いです。

演者報告

須永茉莉（広島大学大学院）

日本体育学会 3 日目の午後に、「注意の向け方とパフォーマンスの関係 ―卓球のフォアハンドおよびスマッシュを用いた意識制御理論による検討―」という題で、ポスター発表をさせていただきました。私自身、今回の体育学会が初めての学会参加、かつ初めての発表ということもあり、まずはポスターの作り方を同じ研究室の先輩に教えてもらうことからの挑戦でした。

今回発表させていただいた研究は、運動時の注意の向け方に焦点を当て、卓球のフォアハンド、スマッシュ動作を用いて得点枠への的当て課題を行い、外的に注意を向けている場合（ボールの軌道や落下点など）と内的に注意を向けている場合（自分のフォームなど）でのパフォーマンスの違いについて検討することを目的として行ったものでした。私自身の競技者としての興味関心をもとに行った研究であったため、いったいどれほどの方が興味を持ってくださるのだろうと少し心配していましたが、当日は想像以上に多くの先生方がポスターを見に来てくださいました。注意に関する研究をされている先生からは私の興味に近い研究を紹介していただいたり、異なる分野の先生からは実験方法についてアドバイスをいただいたり、卓球をされている先生からは研究を現場で活かすヒントをいただくなど（もちろん後日卓球をするお約束もしました）、メモを取る時間も惜しいほどにたくさんのご意見を頂戴することが出来ました。私は今後も注意に関連した研究を進めるつもりなので、今回いただいたご意見を参考に、また新たな研究計画を詰めていきたいと考えています。

普段はテーマに対して一人で向き合うことが多い研究生生活ですが、このような機会をいただいたことで「研究したことが無駄ではなかった」「面白いと思ってもらえるんだ」と、研究をもとにして話が広がる楽しさや、つながりができていく面白さに触れ

ることができ、今後どんな研究をしていこうかとさらに期待が膨らみました。また、今回のポスター制作や発表の準備を通して、より多くの方に研究内容を知ってもらうためにポスターを見やすく工夫すること、研究の要旨を明解かつ面白く説明することについて、改めて考えるきっかけをいただきました。せっかく研究をしても、その内容をうまく伝えられなければ意味がありません。自分自身が発表することはもちろん、大会中、多くの先生方の発表を聴かせていただいて気付くことも多くありました。研究に協力していただいた方の想いを無駄にしないためにも、これからは研究を通して「伝え方」もスキルアップさせていきたいと思っています。

今回の発表にあたり、このような機会を与えてくださった体育学会の先生方、研究を後押ししてくださった先生方、実験参加者のみなさん、ご意見をくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。たくさんの方の気付きを与えてくださり、ありがとうございました。

大会参加記

深見将志（日本体育大学大学院）

平成25年8月28日から30日に、滋賀の立命館大学びわこ・くさつキャンパスで日本体育学会第64回大会が開催されました。大会最終日に若干の雨が降ったものの、学会期間中のほとんどが晴天であり、天候に恵まれた大会となりました。以下、本大会での体験についてご報告申し上げます。

大会前日の27日正午に私が所属する日本体育大学（東京都）を2台の車で出発し、6時間ほどかけて滋賀県に到着しました。道中の車内では、先生との世間話や研究の話など、普段ではできないような内容の濃い話しができ、とても貴重な時間を過ごさせていただきました。このような経験も学会参加の醍醐味ではないでしょうか。翌28日（大会1日目）のキーノートレクチャーでは、「スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学」と題して、私の先輩である荒井弘和先生（法政大学）にご講義いただきました。「スポーツ心理学はスポーツ基本計画を中心的に支えることができる」を合言葉に、スポーツ基本計画の今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策について、スポーツ心理学はどのように貢献できるのか、先生が関わっている研究・実践的側面から示していただきました。さらに、「スポーツ活動の推進」についてソーシャルキャピタルの概念からご説明していただき、とても興味深い内容でした。29日（大会2日目）のキーノートレクチャーは、今中國泰先生より「知覚・認知と運動行動における無意識性・潜在性」についてご講義いただきました。本講義では、感じない刺激が運動を早くすること、無意識的フィードバックが運動スキルを向上させていることなど、知覚・認知研究の最新の研究動向をご紹介いただきました。今中先生のご講義は、知覚・認知に関する知識を専門書から得ていた私にとって智見を深めるものとなりました。両先生の学識の豊かさに基づいた発表は、私にとって刺激的な学びとなりました。

今大会のポスター発表では、スマートフォン用アプリケーションの開発を研究発表なさっている先生と意見交換させていただいたことが印象に残っております。新たな試みに着手する積極性や可能性について熱い思いをお聞きし、私自身の研究に対する考え方を改めさせられるきっかけとなりました。しかし、その一方である先生と意見交換させていただいた際に、「このデータの解釈は私がしたものではないのでよく分かりません」など研究発表に無責任な姿勢で臨まれていることに、多少の危機感を覚えた研究発表の場でもありました。私のような若輩者が述べるようなことではないと理解しておりますが、今大会で感じたことを胸に刻み日々精進していく所存です。

最後になりますが、今回で4度目の大会参加である新参者の私に、大会参加記の執筆という任を与えて下さった体育心理学専門領域の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。

Ⅱ．研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会 活動報告

西垣景太（中部大学）

昨年に引き続き、打ち合わせ会や研究会という形で活動が行われました。2013スポーツ心理学会で打ち合わせを行う機会が設けられました。2013年11月に日本体育大学で行われた日本スポーツ心理学会にて、昼休みを利用しての打ち合わせ会となりました。議題としては、以前から話が挙げられていた、関連書籍の翻訳に関する話と、スポーツ社会心理学の教科書となるような書籍の執筆についての話でした。この会の中で、翻訳ではなくスポーツ社会心理学のオリジナル書の発刊を目指すこととなりました。執筆については、関連する研究内容についてのレビューと、指導現場で実際に活用するためのワークシート用の参考例も含めたらどうかなど、具体的な案も出されました。その後の方向性は、研究会事務局をご担当の九州大学の杉山先生を中心に進めていくことが確認されました。

2014年3月には、福岡大学で開催された九州スポーツ心理学会終了後、九州大学にて研究会が開催されました。ラウンドテーブルディスカッションとして、我が国のスポーツ社会心理学研究の現在と未来をテーマとしました。スポーツ社会心理学の本の発刊を目指すためには、キーワードを挙げて内容の整理を行いました。その中には、社会的スキルに関する内容、個とチームの関連性やチーム力に関する内容、スポーツ指導に関わる内容など、多くのキーワードが挙げられました。今後、他の内容の検討と絞り込みを行い、具体的な構成を検討していくこととなりました。

また、研究会の定例化について検討され、平成26年度は6月の末に研究会を開催することを予定しました。さらに、今後ますますのメンバー拡充を視野に入れ、若手研究者や院生への声掛けにより、参加を促していくことが話し合われました。

2014年8月には、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、第7回アジア南太平洋スポーツ心

理学会国際会議（ASPASP International Congress）ならびに第41回日本スポーツ心理学会大会が開催されます。研究会でもシンポジウムやワークショップへの提案がなされました。今回の大会テーマは、「スポーツ・運動を通じて人々の絆を強める：Strengthening the bonds with people through sport and exercise」とされており、現在の日本そして今後の日本において重要なテーマだと考えられます。復興に向けての継続的な活動や、2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、今後ますます日本のスポーツ界が活性化されていくことが期待されます。その中でも、トップアスリートの育成のみならず、国民の幅広いスポーツ環境が整備され、より活発な社会となることを期待します。また、研究者として、その方向性の一助となるような研究成果を示していくことも重要な課題だと考えられます。

研究会員の募集も随時行っております。スポーツ社会心理学領域に関心のある方は、下記事務局までご連絡頂けると幸いです。

お問い合わせ先：

スポーツ社会心理学研究会事務局
杉山佳生先生
九州大学大学院人間環境学研究院
人間科学部門健康・スポーツ科学講座
sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会（ISMTE）と国際応用スポーツ心理学会（AASP）をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。

本研究会は、現場の指導者や選手を対象に、スポーツメンタルトレーニング指導士が情報の提供をし、選手や指導者が現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2013年度は、東海大学研究会が毎週1回、関東地区、静岡県、愛知県、栃木県の各研究会が毎月1回、中京地区が不定期で年3回、横浜地区が不定期で年6回の開催をしている。残念ながら、北海道、沖縄、福井、秋田、長崎研究会が休止中となっているが、山口県研究会が立ち上がるめどができてきた。

情報収集活動としては、研究会のメンバーがニューオリンズで開催された国際応用スポーツ心理学会（AASP）に9名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。たとえば、登録されたコンサルタント（AASPの資格）に関するセッションでは、北米には173名の資格取得者がいて、AASPのメンバーの66.5%が資格を取得し、スポーツ心理学（メンタルトレーニング・心理的サポート）のプロフェッショナル（専門家）としての専門性が向上し、資格をもつことの価値や質が向上している。さらに、スポーツ心理学の範囲（パフォーマンス心理学・健康心理学・カウンセリング・メンタルヘルス・臨床心理学など）、社会心理学（子供のスポーツ・チームワーク・コーチング・コミュニケーション・身体障害者のスポーツなど）が広がってきている。この資格はプロに対して有益であるし、大学スポーツ連盟（NCCA）は、この資格を認めており、最近是他の組織との協力関係（APA：アメリカ心理学会）が広がってきたなどの報告があった。さらに、IMGアカデミーというプロ選手育成学校の報告があり、そこにはテニス、野球、バスケットボール、ラクロス、アメリカンフットボール、ゴルフ、サッカーなどでプロを目指す小学・中学・高校生が世界各国から800名いて、9名のメンタルトレーニングコーチが心理的サポートをしていると報告があ

ったため、高妻（東海大学）が実際にここを訪れ、そこで行われているプロ選手育成方法の情報を収集し、各研究会で報告した。

2013年北京で開催された国際スポーツ心理学会（ISSP）にも会員が参加し、世界各国から発表されたメンタルトレーニングに関する情報を研究会で報告した。特に、アジア南太平洋地区スポーツ心理学会のシンポジウムでは、日本、フィリピン、オーストラリアなどのメンタルトレーニングの実践例が紹介され、また韓国のアーチェリーやプロゴルファーに対するメンタルトレーニングの実践例なども研究会で報告した。

このような学会で取り上げられた内容を報告し、その情報を発展させ、現場でどう応用するかという形式で研究会は開催されている。

一方、毎月開催される関東地区や静岡県研究会、また毎週開催の東海大学研究会では、自己紹介を兼ねた情報交換が30分程度行われ、参加者や主催者側からの話題提供が行われ、同時にいくつかの心理的スキルや実先例に対してディスカッションが行われている。またスポーツメンタルトレーニング指導士の資格取得者からの話題提供や現場での実践例、さらに国際学会からの世界の最新情報などが報告されている。加えて、参加者の選手やコーチからの報告や話題提供、映像による試合や練習場面での報告からグループを作りディスカッションなどが盛んに行われている。研究会後は、懇親会等で参加者同士によるさらなる情報交換が毎回行われている。

もちろん、会員や学生たちは、日本体育学会、日本スポーツ心理学会、日本スポーツメンタルトレーニング指導士全国研修会や各地区研修会に参加し、その情報の提供や交換を研究会で実施している。本研究会は、現場のコーチや選手の参加が多いため現場での実践、競技力向上を目的とした情報交換（研究と現場・実践のキャッチボール）が盛んに行われている。最後に、このような活動に興味を持った大学で教鞭をとっている研究者やスポーツメンタルトレーニング指導士の資格取得者のさらなる参加を希望するものです。

運動学習研究会 活動報告

山本裕二（名古屋大学）

第22回運動学習研究会は、2013年9月12日～14日に、愛知県蒲郡市にある海に面した風光明媚な西浦温泉銀波荘で開催されました。今回は口頭での発表のみで、14演題の発表があり、32名の参加がありました。

一演題30分の発表に、15分以上の質疑という学会大会にはない長い発表・討論時間を設けるのが、この会の特徴です。一泊二日という日程で、都市部で開催されるときには、交通の便が良いことなどから、演題数も増え、十分な議論をする時間がない場合もありますが、できるだけ隔年では、少し不便(?)なところで、二泊三日でじっくり時間をかけて議論しようというものです。したがって、発表中にもわからない点は、参加者からどんどん質問が出され、発表者の意図を理解したうえで、建設的な議論を進めようという参加者全員の意図が会の進行を盛り上げていきます。

また、合宿形式で、二泊三日の間、じっくりと参加者同士の交流ができるため、発表時間以外にも様々な議論が行えるため、発表者だけでなく、参加者にとっても大きな刺激になるものと期待しています。特に、大学院生が約半数を占め、学会などではじっくり話すことのできない他大学の研究者と交流できること、さらには大学院生同士で交流を深める場になることは大きなメリットであると思われます。太平洋を見ながら、露天風呂につかり、運動学習にかける夢を語ることは、若手研究者育成の場としての役割も担っていると思われます。今年度は、夏に開催されるASPASPの関係で、開催日程が未定ですが、今後もこの会を継続していきたいと考えています。

発表者と発表演題（発表順）

発表者	演 題 名
太田 啓示	リスク下の一致タイミング課題遂行における非最適戦略
宮田 紘平	発声と全身運動の協調でも引き込み現象が起きる
佐々木丈予	心理的プレッシャーが1歩踏み出し運動における初期姿勢ならびに予測的姿勢制御に及ぼす影響
鳥越 亮	自動車運転時の障害物通り抜け課題における視線の振る舞い
田辺 弘子	クラシックバレエの6つの基本立位時の関節コーディネーションと筋活動の関連性
麓 信義	年少児におけるキックフォームの発達、あるいは、変化：フォーム変化をどう理論づけるか
山下 大地	サイドステップ動作における左右肢の役割分担
那須 大毅	ダーツ熟練者にみられる2つの方策
山本 耕太	3ボールジャグリング学習過程における協応パターンの変化
平川 武仁	マシンローイングにおける協応パターンの変化
藤井 慶輔	バスケットボールの1対1における防御者の力学的準備状態
小川 茜	選択反応課題における2者間の譲歩・衝突行動
倉松 由子	片麻痺者の視覚制約時の立ち上がり動作における運動探索
山本 裕二	「動き」から「知の起源」を探る

臨床スポーツ心理研究会 活動報告

千葉陽子（筑波大学大学院）

「臨床スポーツ心理研究会」が、平成25年8月28日に開催された。事例は、筑波大学教授の中込四郎先生より「競技終盤にさしかかったアスリートの『夢』を介した心理サポート」というテーマで、「試合に集中できない。トレーニングを再開できない。」といった主訴で来談したナショナルレベルのアスリートの面接事例が報告された。そこにはクライアントの『夢』の報告を手がかりにしたサポート過程が詳細に述べられた。折しも著者は、所属している筑波大学で『夢』をテーマにした勉強会に参加していた。ユングは夢を隠さないと述べており（川寄，2005）、夢の奥深さを感じていた。しかしながら、夢は相当難しく到底私の容量をはるかに越えているため、解釈的なことはあまりできない。夢を最初に聞いたときのインパクトを大切にしようという思いを抱きながらこの研究会に参加した。

武田大輔先生（流通経済大学）の進行のもと、鈴木壮先生（岐阜大学）を指定討論者にむかえ、フロアとの交流を深めながら140セッションにわたる面接過程が語られた。クライアントは4年半の面接過程で80個もの夢をThに報告している。その夢をてがかりに内的なものから外界での出来事に言及し、競技との関わりや父親とコーチの関係を深めていった。クライアントの最初の主訴が、メンタルトレーニングを教えてほしいというのが印象的だった。しかしながら、Thはメンタルトレーニングには主眼をおかず、『夢』を扱っている。それについて、フロアから「Thがこのケースを夢で聞いていこうと思ったのはどんなところからなのか？」という質問があった。Thはそこでは多くを語らなかったが、長い臨床経験の中での直観の部分が動かされてのことだと著者は受け取った。

クライアントは、競技終盤に意欲低下を訴え、試行錯誤しながら次の新たなステージへ移行している。その際の「夢」の報告は多様なメッセージを送って

いるように感じた。印象的だったのは、「合っていないベストを自ら選ぶ夢」であった。これは現実レベルでコーチとの関係性や動きにズレが生じていたりするところとつながっているように感じた。そして、「帰ってくる時に行った道とは全然違うどこかの地下道を通らねばならない夢」からは競技引退を考え始めていたのだろうかというクライアントの心の動きを感じた。

また、LMTが4回実施されている。1回目では、道と川が鋭角に描かれ、とても窮屈、しんどい印象を受けたと同時にアスリートはこういう世界でいきているのだろうかというイメージを彷彿させるものがあつた。最終的（LM4回目）には、少し画とクライアントが距離をとっているように感じ、競技に収まりをつけていくようなイメージを重ねた。

夢の難しさと不思議をより一層強めた夏の夜だった。

スポーツ動機づけ研究会 活動報告

菅生貴之（大阪体育大学）

2013年8月5日から7日の2泊3日の日程で、第11回スポーツ動機づけ研究会が開催されました。北星学園大学の蓑内豊先生のご尽力により会場提供をいただき、北海道札幌での開催となりました。札幌の中心部からも大変近にもかかわらずとても落ち着いた雰囲気のキャンパスの中で、16名の参加者による活発な研究会が行われました。今回ははるばる北海道まで参りましたので、これまでとは趣向を少し変え、2泊3日の日程での開催としたり、フィジカルアクティビティの長い時間を設定したりと、新しい取り組みが多く取り入れられました。

行われたプログラムの概要は以下の通りです。
(敬称略)

口頭発表1：幼児における相対的年齢効果に関する研究 川田裕次郎（東京未来大学）

口頭発表2：高校および大学野球部における動機づけ雰囲気へのチームメイトへの影響 平間康允（札幌国際大学）

RTD1：実践に役立つ動機づけ研究を考える 司会：北村勝朗（東北大学）

RTD2：動機づけの測定法を見直す 司会：西田保（名古屋大学）

ワークショップ：「IZOF理論」による情動コントロールの技法実習 蓑内豊（北星学園大学）

口頭発表3：アスリートにおける起床時コルチゾール反応と心理尺度との関連性 菅生貴之（大阪体育大学）

緊急レポート：文部科学省有識者会議（タスクフォース）レポート 土屋裕睦（大阪体育大学）

メンバーの交流がもともと深いこともあり、大変アットホームな雰囲気の中、ざっくばらんな議論が展開されたと思います。昨年「スポーツモチベーション」という西田保先生編集による成書（大修館書店）が完成し、動機づけ研究もひと段落、という時期を迎えたように感じています。それを踏まえて今

回の研究会では、特にこれまでの研究会で扱われてきた成果をもう一度見つめなおし、新しい取り組みによって動機づけ研究を切り開いて行こうという意図が感じられました。私も口頭発表において、自身が行っている生物学的な指標について紹介させていただき、かなり大胆な提言をさせていただきました。私としては冷や汗をかきながらの発表でありましたが、このような奇抜な発想を提言できるのも、この研究会ならではの、と思います。

また、今回特に新しい企画として、日程を長く設定したことから、2日目の午後をフィジカルアクティビティの時間として設定し、近隣の「パークゴルフ場」へ移動してプレーすることとなりました。「パークゴルフ」は全国的にはまだそれほど普及していないと思うので、聞きなれない方もいらっしゃるかと思いますが、発祥の地である北海道では大変人気のあるスポーツです。私はゴルフを専門種目としていましたので、うまく行くだらうと思っていましたが、それが甘かったことを思い知らされました。メンバーの交流も深まり、とても良い時間であったと思います。

研究会としては内容も雰囲気も成熟してきていると思います。若手の方もメンバーに増えてきて、今後も発展していくことを願ってやみません。会場のお世話をいただいた蓑内先生、代表者の西田先生をはじめとする、運営に関わられたすべての先生方に感謝を申し上げます。

研究会に興味のある方は下記までご連絡をいただきたいと思います。

西田保先生 052-789-3952

nishida@htc.nagoya-u.ac.jp

Ⅲ. 研究室紹介

研究室紹介 大阪体育大学 スポーツ心理学・スポーツメンタルトレーニング（SMT）研究室

菅生貴之（大阪体育大学）

大阪体育大学では2006年にカリキュラムの大幅な改編を実施しました。その折に様々な時代的な要請もあって、「スポーツ心理・カウンセリングコース」という、おそらく体育系大学学部では初のスポーツと心理を専門とするコースが新設されました。

「カウンセリングマインドを持った体育・スポーツの指導者」育成を目指して、保健体育科教員免許の取得とともに、様々な心理学関連講義を開講しています。たとえば「スポーツ心理学実験実習」や「認知・行動分析論」、「コーチングの心理学」、「教育カウンセリング」といった科目があります。学部のゼミは心理コースのみで5名の担当教員がいますので、自分の関心のある研究分野のゼミを希望して選択することができます。心理コースは学内でも人気のあるコースで、定員（60名）よりもかなり多くの学生が希望してきます。

また、大学院スポーツ科学研究科は博士後期課程を持ち、関西の体育学研究・教育関連分野に多くの人材を輩出してきています。近年では心理を専攻する大学院生の比率が大変増えていて、研究室は活況を呈しています。現在研究室をリードしてくださっている荒木雅信教授、土屋裕睦教授のみならず、鷹野健次先生、河島英隆先生、調枝孝治先生など、大阪体育大学心理学研究室的の歴史を作ってきた先生方に感謝する気持ちがとても強く、よい環境の中で教育・研究を行わせていただいていると感じます。

筆者の学部ゼミでは、SMTを中心とした実践活動の効果を、生理学的指標や心理学的指標を用いて科学的に検証するといった卒業研究の内容が多いようです。近年では大学院教育とのつながりも深まってきたため、学部生もとても質の高い卒業研究を仕上げて卒業をしていきます。彼らの主要な進路である教師や公務員、一般企業などで、こうした論文執筆の活動が直接役に立つとは思いません。しかし、

科学的な先行研究を集めて、正しいということが思い込みによるものでないことをしっかり確認させていき、自分の言動に責任を持たせることがこのゼミ活動の狙いとなっていると思います。卒業時に彼らは、コースに所属する2・3年生の後輩たち200名ほどを前にして発表します。強い緊張感の中で発表する機会は彼らにとってはかけがえのない経験であると、毎年感じています。

こうした心理学に特化した講義を受けた学生の中には進学を志す学生も少なくありません。心理を担当する大学院教員は4名おり、各教員に1～2名の大学院学生が入学してきますので、毎年5～6名くらいが修士に入学してきています。

筆者の研究室では、心拍変動や脳波、さらにはホルチゾールなどの生物学的マーカーを用いてストレスやSMT技法の効果を検討する者や、心理指標を用いてより実践的な立場で検討している大学院生がおりますが、多くの院生が日本スポーツ心理学会認定「SMT指導士」の資格取得を目指しています。近年では、修了後ただちに資格を申請して取得に至ることが数年続けて出ています。資格の取得のためのプログラムも少し確定してきた感じがあります。カリキュラム以外では「スポーツメンタルトレーニングチーム」という組織があり、本学のトレーニング科学センターと連携のもと、学内外で幅広いサポート活動を行っており、こうしたことも資格取得のために大いに役立っていると思います。今後も、我が国スポーツ心理学をけん引してくれるような研究者を送り出していけるよう、頑張っていきたいと思っています。



写真1 学部生のゼミ研究発表会



写真2 大学院研究室のメンバー

IV. 学位論文紹介

中学校体育の動機づけ雰囲気をもたらす教育的効果

中須賀巧（福山平成大学）

学位：博士（教育学），授与機関：九州大学

取得日：2013年12月31日，指導教員：杉山佳生准教授

【研究の背景と目的】

現行の中学校学習指導要領は，平成20年に改訂され，学校教育では，生徒の「健やかな体」及び「豊かな心」の育成を基盤に据えた指導が求められるようになった．この方針に鑑みると，体育では，①生徒の「健やかな体」の育成を目指し，生涯スポーツを促進すること，②生徒の「豊かな心」の育成を目指し，体育と道德教育との関連を図り，道德性を育成することの2つを実現することが必要であると考えられる．しかし，どのような体育の環境を設定し，展開することが，生徒の生涯スポーツに向けた取り組みや道德性の発達に影響を与えるのかについては明らかにされていない．そのため，生涯スポーツ促進や道德性の育成に有効的な体育の授業を展開するまでには至っていない．

本論文では，達成目標理論における動機づけ雰囲気（「重要な他者によってつくられる環境の構造」などと定義されており，熟達雰囲気と成績雰囲気の2つに大別される），ならびに目標志向性（個人がどのような達成目標を持つかという傾向であり，自我志向性と課題志向性の2つに大別される）に着目した．特に，本論文で取り扱う動機づけ雰囲気は，体育心理学や保健体育科教育学の領域において比較的新しい概念であり，わが国における先行研究数も少なく，授業現場に提供できるほどの十分な知見が蓄積されていない．また，体育授業の現状に目を向けると，競争を抑制していこうとする傾向が見られ，競争に価値を置く成績雰囲気の授業は，教育現場で受け入れがたいとされている．しかし一方で，競争が学習や運動への動機づけを高めることを示唆する研究知見も見受けられる．これらのことから，成績雰囲気の授業が教育的効果を有する可能性もあり，そのための必要条件を検討することも重要である．

以上のことから，本論文では，体育授業における動機づけ雰囲気及び目標志向性に着目し，体育の課

題として挙げられている生涯スポーツの促進及び道德性の育成に有効的な授業の雰囲気について明らかにすることである．また，競争に動機づけを高める効果があると推測されているため，成績雰囲気が生徒の競争心にどのような影響を与えているのかについても検討する．

【結果の概要】

- 1) 体育授業における動機づけ雰囲気，目標志向性，体育に対する好意的態度の関係についての因果モデルを設定し，その妥当性を検証した．その結果，熟達雰囲気から体育に対する好意的態度への直接効果と，熟達雰囲気が生徒の課題志向性に影響を与え，その課題志向性が体育に対する好意的態度に影響を与える間接効果の両方が確認された．また，成績雰囲気から体育に対する好意的態度への直接効果は確認されなかったが，成績雰囲気と体育に対する好意的態度の関係に自我志向性が媒介するという間接効果が確認された．（第1章研究1）
- 2) 体育授業における動機づけ雰囲気，目標志向性，日常的な運動実施に対する認知の関係についての因果モデルを設定し，その妥当性を検証した．その結果，成績雰囲気及び熟達雰囲気から日常的な運動実施に対する認知への直接効果が確認されたが，熟達雰囲気が課題志向性を媒介して，日常的な運動実施に対する認知に影響を与えるという間接効果は確認されなかった．また，男子において，成績雰囲気から自我志向性に影響を与え，その自我志向性が日常的な運動実施に対する認知に影響を与えるという間接効果が確認された．（第1章研究2）
- 3) 体育授業における動機づけ雰囲気，目標志向性，道德性（他者との協力，公正な取り組み）の関係についての因果モデルを設定し，その妥当性

を検証した。その結果、成績雰囲気から道徳性への直接効果と、熟達雰囲気から道徳性への直接効果ならびに課題志向性を媒介する間接効果が確認された。（第2章）

- 4）体育授業における成績雰囲気、自我志向性、競争心（手段型競争心、過競争心、負けず嫌い、競争回避）の関係について因果モデルを設定し、その妥当性を検証した。その結果、成績雰囲気から過競争心及び競争回避への直接効果と、成績雰囲気が自我志向性を媒介して、手段型競争心、過競争心、負けず嫌いに影響を与える間接効果が確認された。また、男子において、成績雰囲気から自我志向性を媒介して競争回避に影響を与えるという間接効果が確認された。（第3章）

【まとめ】

本研究の結果は、熟達雰囲気の授業が生涯にわたって運動・スポーツを実施することや生徒の道徳性を育成することに有効的であることを示唆するものである。また、熟達雰囲気の中で生徒が課題志向性を持つことで、その有効性をさらに高めることが期待できる。このことから、体育授業では熟達雰囲気の授業を実施していくことが必要になるといえる。

一方で、成績雰囲気や自我志向性も、部分的ではあるが、生涯スポーツの促進や道徳性の育成に有効性を持っていることが確認され、欧米諸国の先行研究とは異なる知見が示された。成績雰囲気の授業で自我志向性が高まった生徒でも、競争を単なる勝敗を決定づけるものとしてではなく、自己成長を促す手段として捉えることができれば、学習意欲を向上させ、仲間づくりを促進させることができる可能性が示唆された。（第4章）

【今後の課題】

- 1）本研究の結果は、一時点で収集されたデータから得られたものである。今後は、縦断的な調査を行ない、時系列による変化を検討することで、動機づけ雰囲気の教育的効果をより明確にして

いく必要がある。

- 2）本研究の結果を踏まえて、実際の体育授業で動機づけ雰囲気づくりを行ない、その実践的効果を検証する必要がある。

【謝辞】

こうして博士論文を完成させることができたのも、九州大学の杉山佳生准教授のお蔭だと思っております。本当にありがとうございました。また、同大学の西村秀樹教授、大柿哲郎教授、新谷恭明教授からは多くのご指導とご助言をいただきました。

本研究は、多くの方々の協力を得て、成し遂げられました。調査にご協力いただいた中学校の先生方ならびに多数ある質問項目にも丁寧に回答してくれた生徒の皆様は心よりお礼申し上げます。また、論文作成において、的確なアドバイスをしてくださった熊本学園大学の橋本公雄教授、九州工業大学の磯貝浩久准教授、九州大学の大学院生は、本当に心の支えになりました。ありがとうございました。

ハーディネスとストレスおよびスポーツ活動との関連

門利知美（川崎医療福祉大学）

学位：博士（健康科学）、授与機関：川崎医療福祉大学大学院

取得日：2014年3月14日、指導教員：松枝秀二教授・田島誠准教授

【研究の背景】

われわれは、強いストレスを受け続けるとうつ病などの精神的症状や胃潰瘍などの身体的症状があらわれることが多い。一方で、強いストレスを受け続けても、これらの症状があらわれない人もいる。その違いには様々な個人要因が考えられ、そのひとつとしてKobasa（1979）が提唱した「ハーディネス（hardiness）」が挙げられる。ハーディネスとは、厳しいストレスに曝されながらも比較的健康を害することの少ない人々が持っている性格特性であり、以下の3要素から構成されている。

①コミットメント：自分が誰であり、何をしているのかについての信念であり、自分自身や仕事や家族、対人関係、社会組織などの人生のさまざまな状況に対して自分を十分に関わらせている傾向

②コントロール：個人が出来事の推移に対してある一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ、かつそのように行動する傾向

③チャレンジ：毎日の生活において安定性よりもむしろ変化が人生の標準であるという信念に基づく傾向

先行研究では、ハーディネスが高いとストレスの認知・経験が少なく、ストレス反応が低いことが明らかにされている。本研究では、ハーディネス3要素の関係性からハーディネスとストレスの関係、ハーディネスとスポーツ活動の関係、ハーディネスタイプ別のメンタルトレーニング（mental training；MT）がアスリートに与える効果について明らかにすることを目的とした。

【研究1】大学生のハーディネスがストレスおよびストレス反応に及ぼす影響 ーストレス尺度を用いた調査研究ー

ハーディネス3要素はそれぞれ異なる特徴があるため、対象者をハーディネス3要素すべて高い群

（高ハーディネス群；高H群）、すべて低い群（低ハーディネス群；低H群）、コミットメントのみ下位群（低コミットメント群；低Com群）、コントロールのみ下位群（低コントロール群；低Con群）、チャレンジのみ下位群（低チャレンジ群；低Cha群）の5つの群に分け、ハーディネスが日常生活ストレスおよびストレス反応に及ぼす影響について調査した。低Com群は「実存的（自己）ストレス」と「抑うつ・不安反応」、低Con群は「対人ストレス」、低Cha群は「対人ストレス」と「物理・身体的ストレス」において特徴がみられた。つまり、同じハーディネスであっても、コミットメントが低い人、コントロールが低い人、チャレンジが低い人では経験するストレスに対する捉え方は違うことが示唆された。

【研究2】大学生のハーディネスがテスト不安およびストレス反応に及ぼす影響

ー定期試験をストレスとした調査研究ー

次に、大学生が共通して経験するストレスフルな出来事である大学の定期試験をストレスの経験と想定し、ハーディネスの各群のテスト不安およびストレス反応の変化を調査した。低Com群は試験直前よりも試験2ヶ月前に抑うつや怒りを感じやすいこと、低Con群は試験直前に試験に対する不安を感じやすいこと、低Cha群は試験直前に抑うつや怒りを感じやすいことが示されたことから、研究1の結果を支持する結果が得られた。

【研究3】ハーディネスがストレス負荷課題時におけるストレス反応に及ぼす影響

実際に対象者全員に同じストレスとしてストレス負荷課題（数的課題・アナグラム課題）を与え、ハーディネスがストレス反応に及ぼす影響について心理学的指標（ストレス反応尺度）、生理学的指標

(電気抵抗値、血流量と皮膚温度の変化、脈拍数、唾液アミラーゼ濃度)、行動学的指標(課題成績)の観点から検討した。コミットメント得点と電気抵抗値の安静時、ストレス負荷前の変化量の間、コントロール得点と電気抵抗値の安静時、ストレス負荷後の変化量の間に関係が認められ、コミットメント得点およびコントロール得点が高いとストレスを経験した際に生理反応が表出しやすいことが示唆された。

【研究4】大学生のハーディネスとスポーツ活動の関係

本研究の結果をアスリートに応用させるためには、まず、ハーディネスとスポーツ活動の関係について明らかにする必要がある。そこで、一般大学生と国体強化指定ジュニアアスリートを対象に、ハーディネスとスポーツ活動の関係について調査した。日常的に運動を実施している人は実施していない人よりもハーディネス得点が高いことが明らかとなった。さらに、運動部活動に所属している人は運動サークルに所属したり趣味で運動を実施している人よりもコミットメント得点が高く、その違いには所属の違いが関係していることが明らかとなった。また、競技レベルの違いにおけるハーディネス得点の比較を行うと、競技レベルの高い選手は一般的な選手よりもハーディネス得点が高いことが明らかとなった。

【研究5】ハーディネスタイプ別の心理的サポートが大学生アスリートに与える効果

最後に、事例的研究として、ハーディネスタイプ別のMTの実施がアスリートの心理的競技能力やパフォーマンスに与える効果を検討するために、大学生アスリート26名に対して約8ヶ月間のMTを開始し、その中でもハーディネスの中に低い要素のある5名(低Hタイプ、低Comタイプ、低Conタイプ:各1名、低Chaタイプ:2名)に対して個別のサポートを行った。低Comタイプの選手には積極性を高めるためにサイキングアップを、低Conタイプの選手には自信を高めるために目標設定を、低Chaタイプ

の選手には気持ちの切り替えができるようになるためにポジティブシンキングを行うようにそれぞれ指導した。低Hタイプの選手には上記3つのプログラムを行うように指導した。心理的競技能力診断検査の得点の向上と記録の更新が認められたのは低Chaタイプの選手2名と低Hタイプの選手1名であったことから、この3名の選手には今回のサポートプログラムが適していたと思われる。

【まとめ】

本研究の結果、ハーディネスの特徴の違いにより、ストレスに対する捉え方やストレスを経験した際の生理反応の違いがみられることが明らかとなった。また、日常的な運動実施の有無、運動時間・運動頻度の違い(所属の違い)、競技レベルの違いによってハーディネスの違いがみられることが明らかとなった。

実際の現場でハーディネスを活用する際には、ハーディネスのタイプを参考にすることにより個人に合った心理的サポートの実施が期待できる。また、日常的な運動実施の有無、運動時間や運動頻度、競技レベルといったスポーツ活動に関する情報もハーディネスを活用したサポートの際に非常に重要な情報となるであろう。

【おわりに】

本論文を作成するにあたり、終始丁寧かつ熱心なご指導を賜りました、松枝秀二教授、田島誠准教授、副査の先生方に深く感謝致します。

運動経験がもたらす情動知能への影響

西垣景太（中部大学）

学位：博士（心理学），授与機関：中部大学

取得日：2014年3月22日，指導教員：速水敏彦教授

研究の背景と目的

近年，国内において社会的スキルやライフスキルといった概念と運動経験の影響について研究が進められている．その中で，本研究では情動知能に着目した．情動知能とは「情動を知覚し，思考を助けるために情動を利用すること．また，情動及び情動の知識を理解し，情緒及び知的な成長を促すように情動を制御すること．」（Mayer & Salovey, 1997）と定義づけられており，情動知能が高いことは社会的な成功につながるという研究（Mayer, Caruso, & Salovey, 1999 ; Wong & Law, 2002）などがされている．運動場面においては，情動の知覚や理解，状況に応じた利用の場面が多くあり，運動経験が情動知能の向上に効果的であるという仮説を立て，その関連性を明らかにすることを目的とした．

第1に，運動経験と情動知能の関連についての検討として，大学生を対象とした調査を行った．大学生を対象とした先行研究があるものの，横断的な調査にとどまっている．そのため，今後運動経験と情動知能の向上の因果的関係を明らかにしていくためには，縦断的な検討も必要だと考えられる．運動経験によって情動知能が効果的に向上することを明らかにするため，縦断的な調査と回顧的な調査から運動経験と情動知能の向上について検討した．

第2に，心身の発達過程の中で，時期と運動経験の要因から，情動知能への影響を明らかにすることである．特に，社会性の形成にとって大切な時期である児童期の運動経験と情動知能の向上についての研究は皆無である．そのため，児童期の運動経験に着目した検討を行った．

第3に，研究の最終目標である情動知能の効果的な向上を目指した指導法について検討するため，指導者自身が指導場面において情動知能の向上をどの程度意識しているのかを明らかにした．また，指導方法に対する意識との関連も検討することとした

（第1章）．

結果の概要

1. 大学生の縦断的検討と回顧的検討からみる運動経験と情動知能の関連（第2章）

スポーツ系学科の大学生を対象とした2年間にわたる5回の縦断的な調査から，3年生での調査が他の時期よりも情動知能の自己，他者，状況に応じた得点全般の有意な向上が示され，一般学生よりも高い得点を示した．また，本研究では，運動部所属群よりもその他の群が情動知能の合計点と他者に対する得点が有意に高い結果となった．この結果は，その他の群には学外で運動を継続している学生も含まれている事も影響していると考えられるため，更なる分析と調査対象者を増やした比較検討も今後の研究として求められる（第1節）．

また，大学生を対象とした過去の運動経験からの回顧的な調査からは，現在の運動経験のみならず，過去の運動経験を広く捉え，大学生の頃の情動知能の得点にどのような影響を与えているのかを検討した．その結果，男子と女子では，運動経験の日数や熱心さなどの要因が与える影響は異なり，男子の方が小学校から中学，高校へと上がるにつれてその運動経験年数や熱心さなどの運動経験要因が大きな影響を示していくことが明らかになった．また，運動経験の有無による所属要因では，男女ともに中学，高校，大学よりも小学校の頃の運動経験の有無が大学生の頃の高い情動知能の得点に関連を示している結果が得られた（第2節）．

2. 児童期の運動経験がもたらす情動知能への影響（第3章）

児童期の運動経験に着目し，運動系の習い事と，その他の習い事について検討した結果からは，運動系の習い事の要因が情動知能と相関を示し，運動以外の活動では得られない要因が運動経験にはあることが示された．また，小学校の低学年と高学年の比

較からは、自尊感情が未発達な低学年においては、自分自身の情動知能を過大もしくは過小評価しており、他者評価との一致を示さないのに対し、高学年になると他者評価との一致を示し成長の過程を示す結果となった。運動経験の要因の面からは、低学年では、より熱心に、より楽しく感じる運動系の習い事が、情動知能の自己に対する面全般と目標追求に関する項目、他者への気配りに関する項目への意識を高めることが明らかになった。また、高学年においては、運動系の習い事を多く経験することや、より熱心に、より楽しく感じる運動系の習い事を多く経験することが、情動知能の他者への協力、状況に応じた面での楽天主義や人材活用力への意識を高めることが明らかになった（第1節）。

児童期の運動教室による短期縦断的な調査からは、異なる2集団への調査において、走力という運動能力の向上とともに、教室の前後で情動知能の全般と自己への意識の面で有意な向上が明らかになった。また、運動能力や目標が異なる集団では、運動能力のレベルや熱心度により、運動経験要因と情動知能の得点への関連は異なることが明らかになった。これは、運動能力の変化とともに、自分自身の動機づけや、その集団での自分の社会的地位などが変化することにより、情動知能への関連も異なってくることが考えられる（第2節）。

3. 運動指導と情動知能の意識の関連（第4章）

全児童に共通に与えられる運動の機会として、体育の授業に着目した。体育の専門教員でないことが多い小学校の体育の授業において、教員側の指導の際の意識が重要であると考え、教員の体育の授業における情動知能や指導法への意識を検討した。その結果、指導歴と性別による検討から、指導法の傾聴因子にのみ有意差が認められ、指導歴中期間の男性教員が短期間の男性教員よりも有意に高く、指導歴中期間の教員の中では女性よりも男性教員が有意に高い得点を示した。しかし、情動知能などその他の項目においては、性別や指導歴による有意な差はなく、個人の意識の差によるものであった。また、情動知能への意識と指導法への意識には、どの要因に

においても有意な正の相関が認められたことから、指導法への意識を高めることが情動知能への意識を高めることへもつながることが考えられる。

総合考察と今後の課題

これらの調査結果から、運動経験と情動知能の関連として、縦断的、回顧的な検討から新たな知見が得られた。また、大学生を対象とした研究が多くみられた先行研究の中、児童期の情動知能の変化や運動経験との関連が明らかにされたことは、本研究の大きな成果であると考えられる。今後、中学生や高校生を調査対象とし、思春期の運動経験と情動知能の関連についても、より具体的な要因を明らかにしていく必要がある。また、研究方法としても、調査対象者の人数をさらに増やすこと、群分けの更なる検討を行っていくこと、長期の縦断的調査を継続していくことなどから、運動経験が情動知能の効果的な向上につながることを明らかにしていくことが求められる。それらの研究結果は、コミュニケーション能力の低下が問題視される今日において、運動場面を用いて、情動知能を効果的に向上させていく指導法への一助となると考えられる（第5章、第6章）。

文献

- Mayer, J. D., and Salovey, P. (1997) What is emotional intelligence?. In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence : Educational implications*, Basic Book: New York, 3-34.
- Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, 27, 267-298.
- Wong, C. S., & Law, K. S. (2002). The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The Leadership Quarterly*, 13, 243-274.

スポーツ集団における評価尺度の開発と検討 —学生アスリートを対象としたセルフマネジメント及びチームイメージの観点から—

竹村りょうこ（慶應義塾大学SFC研究所）

学位：博士（政策・メディア）、授与機関：慶應義塾大学

取得日：2014年3月23日、指導教員：佐々木三男名誉教授・加藤貴昭准教授

スポーツ集団研究においては、集団を詳細に評価する手法の停滞が学問領域における課題となっている。優れたチームを客観的に評価することは研究者のみならず、スポーツ競技の指導者、選手にとって意義のある取り組みであり、実社会での社会人基礎力に関する調査において「チームで働く力」が重要視されていることなどからも、集団を対象とする研究が重要な意味を持っていることがわかる。

スポーツ集団研究の中でこれまで開発された尺度は、集団凝集性や集団効力感によって、個々の集団に対する評価の総体が集団の力として評価される傾向であった。しかし、これらの尺度からは集団のパフォーマンスに影響を与える要因を正確に捉えることの困難さが見受けられ、新たな取り組みの必要性を見出した。

本論文はこのような研究傾向に対し、個人の能力（心理的スキル）の総体を集団の能力として捉え、その具体的な能力の解明と、集団凝集性や集団効力感との関連性から、指導現場での実践的な活用に向けた資料を得ることを目指した。特に現代の学生アスリートの視点を重視することで、より実践的で多様な適応範囲を持つ学生の環境や思考に合致した汎用性のある評価尺度の開発を目的とした。運動部活動を通じた集団所属の経験がもたらす教育的価値についても議論し、スポーツ集団としての運動部活動所属経験によって獲得された心理的スキルの、多様な集団での有用性を示すべく研究を位置付けた。

第1章 序論

1章では、本研究の背景と目的を説明し、現代のアスリートやスポーツチームに対する競技経験が持つ意義、スポーツ集団に影響を与える選手個人の心理的要因に着目する必要性を指摘し、本研究の位置付けを明らかにしている。

第2章 理論背景と問題の所在

2章では、現代の学生が実社会において求められている能力として社会人基礎力について触れ、従来のスポーツ集団研究、運動部活動に関する研究を概観し、本研究を遂行する上で重要な概念となるキー・コンピテンシーやセルフマネジメントについて説明している。特に第3章および第4章における理論的枠組みを明確にし、スポーツ集団研究に見られる課題を指摘し、現代の学生に合致した新たな評価尺度の必要性について述べる。

第3章 スポーツ集団における学生アスリートのセルフマネジメントに関する研究

—スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度の開発—

3章では、運動部活動としてのチームに所属する学生に焦点をあて、「集団の競技パフォーマンスに影響を与える、選手自身が主体的に思考・行動し、実践する自己活用力」と定義した、スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する尺度の開発を目的として主に2つの調査を実施した。第1に、予備調査では、既存の関連する尺度の項目を参考にし、また、自由記述調査を通じて得られた回答をもとに多数の項目を収集・作成し、精選の後に本調査で用いる項目群が選定された。第2に、本調査では、選定された項目群をもとにデータを収集し、因子分析を行った結果、キー・コンピテンシーの概念を構成する3つの側面である、「対人」、「個人」、そして、「資源活用」に関連する8つの因子が抽出された。また、各々の因子には概ね満足できる信頼性、妥当性が確保されていることが示され、開発された「スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度（学生アスリート版）」は、スポーツ集団の集団凝集性や集団効力感に正の影響を及ぼす選手個人のマネジメント能力の具現化に繋がると共に、今後の集団研究の発展に寄与することが期待される。

第4章 優れたスポーツ集団の“チームイメージ”を評価する尺度開発研究

4章では、現代のスポーツ集団を捉え、集団凝集性と集団効力感という集団のパフォーマンスに重要な役割を果たす両概念との関連性に着目し、新しい観点である、優れたスポーツ集団のチームイメージを評価する尺度の開発を目的とした。結果から、「チームパフォーマンス」、「チーム調和」という2因子7項目計14項目からなる、優れたスポーツ集団のチームイメージを評価する「スポーツチームイメージ評価尺度」が開発された。尺度によって評価されるチームイメージと集団凝集性、集団効力感との間には、弱い、または中程度の正の相関関係が認められたことから、優れたスポーツ集団としてのチームイメージが強まることは、集団のまとまりを生み出し、チーム全体の自信の向上を導く可能性が示唆される結果となった。本尺度はデータに対する適合も良く、尺度全体としておおむね満足できる信頼性・妥当性が確保されており、優れたスポーツ集団のチームイメージを、課題達成的な側面と集団の調和に向けた側面から客観的に理解する上で役立つと考えられる。

第5章 スポーツ集団における学生アスリート用評価尺度を用いた比較検討

5章では、スポーツ集団における学生アスリート用尺度として開発した、スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度、スポーツチームイメージ評価尺度を用い、デモグラフィック要因（性別、種目、学年、個人成績、ポジション、指導者有無、チーム所属レベル）による比較検討を行った。チーム所属レベルとスポーツ・セルフマネジメントスキル尺度8因子との得点比較からは、「誠実的態度」のみ関東4部以下所属が、関東2、3部所属を上回ったが、それ以外の7因子においては、関東1部／全国上位所属が両者を上回った。結果から、スポーツ・セルフマネジメントスキルの高い個人が集まった集団は、優れた競技パフォーマンスが発揮されていることが示唆された。スポーツチームイメージ評価尺度の分析結果からは、性別比較において、女性の方が男性に

比べて高い得点を示した。その他、個人成績、ポジション、指導者有無、チーム所属レベルの要因において、「チームパフォーマンス」因子に有意差が認められた。新たな評価手法として、スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度の3カテゴリーを用い、個人的側面、対人的側面、資源活用的側面の3次元によるチームの可視化を試みた。実際のデータを用いた継続調査では、同一チームの各年の得点傾向や、同一メンバーによる3時点の調査において、調査時期や競技成績との関連性から検討を試み、その変化は多様であった。スポーツ集団に所属する学生アスリートを対象にした2つの尺度の今後の活用法として、スポーツ・セルフマネジメントスキルとスポーツチームイメージの関連性を検証した結果からは、全ての因子間に中程度の相関関係が認められ、両尺度を併せた活用による効果の可能性が示された。

第6章 総括

6章では、集団のパフォーマンスに影響を与える要因として、開発された評価尺度の活用とその有効性、本研究の課題点と展望を述べ、総括を行う。本研究における成果と研究の展開を図1に示す。



図1 本研究における成果と研究の展開

受傷アスリートのリハビリテーション専心性に対するソーシャルサポートの影響

鈴木 敦 (国立スポーツ科学センター)

学位：博士 (体育科学), 授与機関：筑波大学

取得日：2014年3月25日, 指導教員：中込四郎教授

アスリートの怪我は、身体的問題として捉えられるだけでなく、心理的問題にもつながることが論じられてきた。例えば、Johnson et al. (2012) は、リハビリ期間中の受傷アスリートの問題に、競技アイデンティティの喪失、食行動の変化、恐怖、不安、自信の喪失、痛みに対する無力感、ソーシャルサポートネットワークからの離脱、不規則な睡眠、復帰への執着などがあることに言及している。そして、このような心理的問題を抱えた受傷アスリートへのソーシャルサポートの提供は、ネガティブな情緒反応の軽減、ならびにリハビリ専心性や早期復帰に対して積極的な効果をもつことが主張されてきた (例えば、Duda et al., 1998)。

第1章では、スポーツ傷害におけるソーシャルサポート研究を概観し、2つの課題を明らかにした。1つ目は、リハビリ過程に応じたソーシャルサポートの違いである。Udry (2001) は、受傷アスリートへのサポートを効果的に提供するにはサポートの種類・量・タイミングが重要であることに言及している。しかし、時期 (タイミング) によるソーシャルサポートの変容には、ほとんど関心が向けられてこなかった。リハビリ過程では、時期に応じて受傷アスリートの情緒や求められる要求が異なると考えられ、リハビリ過程に応じたソーシャルサポートの違いを明らかにする必要があると考えられた。2つ目は、ソーシャルサポート享受による受傷アスリートの心理的変化である。先行研究においては、ソーシャルサポート享受によるリハビリ専心性を促進させる心理要因の検討がほとんどなされてこなかった。先行研究の主張 (中込・上向, 1994; 辰巳・中込, 1999) を受け、その心理要因としてスポーツ傷害の受容が考えられた。しかし、スポーツ傷害の受容はKübler-Rossの死の受容や身体障がい領域における障害受容を下敷きに考えられたため、治癒 (復帰) 可能なスポーツ傷害の受容と、「受容」の持つ意味

が異なってくると考えられた。そこで、スポーツ傷害の受容だけでなく、「気づき」がソーシャルサポート享受によるリハビリ専心性の向上を図る上で重要な心理要因であると仮説を立てた。増田 (1998) の気づきが適切な対処行動を導くという指摘や、スポーツカウンセリングにおける気づきが主訴の軽減や競技との関わり方の変容につながるという考えから、ソーシャルサポート享受によるリハビリ専心性を促進させる心理要因としてスポーツ傷害の受容だけでなく、自己や他者に対する気づきを位置づけることが必要であると推察された。

第2章では、上記の先行研究における課題を受け、受傷アスリートのリハビリ専心性に対して有効なソーシャルサポートを検討し、受傷アスリートが享受するソーシャルサポートがリハビリ専心性の向上にいかに関能するのかを明らかにすることを目的として4つの下位検討課題を設定した。以下に詳細を述べる。

第3章 (検討課題1) では、受傷アスリートのリハビリ専心性に対して有効なソーシャルサポートを検討した。ここでは、スポーツ傷害による心理的ダメージの程度を明らかにすること、3段階の仮設状況 (受傷段階、リハビリ回復段階、復帰段階) を設定し、それぞれの段階で受傷アスリートがどのようなサポート提供者から、どのようなサポートを希望しているのかを明らかにし、リハビリ専心性や早期復帰に効果的なソーシャルサポートを検討することを目的とした。457名の大学生アスリートに質問紙調査を行った結果、受傷後に競技意欲が低下し、不安、焦り、孤立感、失望感、抑うつ、疲労感といったネガティブな情緒を高めることが明らかになった。そして、受傷アスリートは、父や母からのサポート希求度を受傷から復帰までの間に段階的に減少させ、復帰段階にコーチやトレーナーからのサポート希求度を増加させた。さらに、チームメートへの

サポート希求は、受傷段階と復帰段階に増加した。サポート内容に関しては、慰め、物質的支援、実践的支援は時間経過とともに希求度が減少し、評価や技術的助言は復帰段階に高い希求度を示した。

第4章（検討課題2）では、個別事例を通して、ソーシャルサポート享受によるリハビリ専心性の促進要因を同定することを目的とした。ここでは、ソーシャルサポートとリハビリ専心性の間に、スポーツ傷害の受容と気づきという2つの心理要因が介在するといった仮説設定のもと、受傷経験のあるアスリート3名の面接調査事例と二次資料による1名の事例を分析資料とした。その結果、ソーシャルサポートを享受し、リハビリに専心するまでに、スポーツ傷害の受容の深まりと同期して、3つの気づき（自己の身体への気づき、競技することの意味への気づき、他者への気づき）が認められた。

第5章（検討課題3）では、検討課題2で得られた知見をもとに質問紙を作成し、共分散構造分析を用いて、受容と気づきのどちらの心理要因がリハビリ専心性に促進的に働くのかを数量的に検討することを目的とした。414名の大学生アスリートに対して質問紙調査を実施した結果、ソーシャルサポート享受によるリハビリ専心性の向上をもたらすまでの心理要因として、スポーツ傷害の受容よりも気づきを介在変数としたほうが適合度の高いことが明らかになった。この結果から、ソーシャルサポート享受によって自己や他者、競技に対する気づきをもたらされ、リハビリ専心性を促進させていると考えられた。

第6章（検討課題4）は、検討課題1の仮設状況を用いた回答方法や、検討課題2と3における回顧的な調査方法では明らかにできなかった受傷アスリートの時系列的なソーシャルサポートの変容、ならびにソーシャルサポートの対処行動への影響について明らかにすることを目的とした。ここでは、中込（2004）の著書に紹介されている慢性的な腰痛を訴え、それが引き金となり、競技意欲の低下を訴えた受傷アスリートYの心理相談事例を分析資料とし、本研究の目的に沿って新たに分析・検討した。その

結果、相談過程において、Yの享受するソーシャルサポートの提供者は、高校時代の友人（旧環境）から徐々にサポートの得られやすい身近な他者（新環境）に移行していった。そして、このようなサポート提供者の変化と同期して、痛みの訴えの軽減や対処行動の積極的な変化が認められた。また、こうした変化の背景には、自己・他者への気づきの高まりが考えられた。

以上の一連の成果を総括すると、以下のように結論付けられる。受傷アスリートが希求するソーシャルサポートは、受傷直後は怪我によって影響を受ける日常生活への援助、復帰前は競技に直接関係する援助であり、それらのサポートは身近な他者から希求される。そして、受傷アスリートがソーシャルサポートを享受することによって、自己の身体への気づき、競技することの意味への気づき、他者への気づきといった自己や他者に対する気づきをもたらされ、リハビリ専心性を促進させている。

状況判断に関わる認知的トレーニング法の構築 ～ラグビーフットボールを対象として～

下園博信（九州共立大学）

学位：博士（学術），授与機関：九州工業大学

取得日：平成26年3月25日，指導教員：磯貝浩久准教授

1. 研究の背景と目的（第1章）

スポーツ場面において状況判断は，「勘がよい」とか「センスがよい」という生得的な才能のように扱われ，単に経験を積みればよくなるとか，あるいは偶発的に学習されるものとされ，系統的・組織的なトレーニングは，ほとんど行われていなかった．しかし，競技場面で的確な判断を行い，的確なプレーを行うことが重要であることは，競技者も指導者も十分に理解していることである．状況判断のコーチングについては，プレーヤーが状況判断をするための道筋を立てておくこと，言い換えれば，的確な状況判断ができるような準備をさせることが重要である．その状況判断については，これまでの研究を概観する限り，効果的なトレーニング方法やコーチング手法が確立されているとはいえない．そこで本研究は，状況判断に着目した認知的トレーニング法を確立することを目的とした．

2. 認知的トレーニング法の開発と評価法の構築

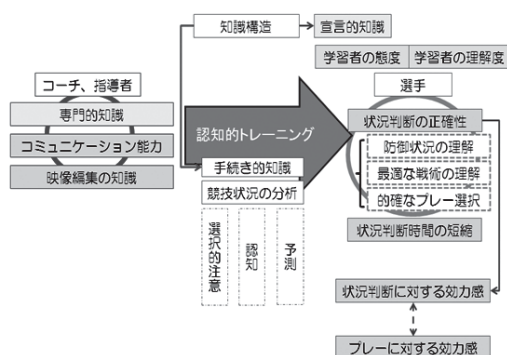
第2章では，認知的トレーニング法の対象や効果についてまとめ提案した（図1）．さらに認知的トレーニング法の開発から，実施条件，評価法までをstep1, step2, step3に分け，認知的トレーニング法が効率よく実施できるための構成と過程（図2）を明確にした．

認知的トレーニング法と状況判断の測定と評価については，状況判断を言語化することの重要性が示唆された．具体的な判断について，防御状況の理解，最適な戦術の理解，的確なプレー選択について言語化させる．評価については，基本的枠組みを作成し，得点化することによって評価を行えるようにした．

3. 認知的トレーニング法と評価法の検討

第3章は，構築した認知的トレーニング法を用いた研究を実施した．ゲーム状況の決定的場面における状況判断について，積極的に考え言語化し，それについて適切な解説が加えられた認知的トレーニング法が効果的であることを立証できた．また，単にゲ

認知的トレーニング法のモデル図



認知的トレーニング法の構成

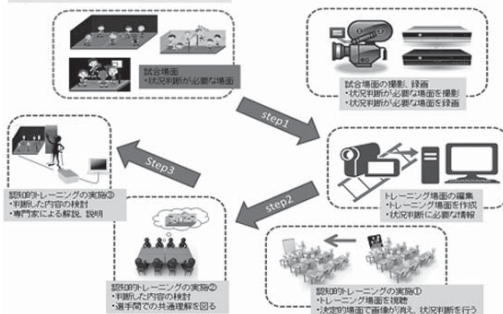


図2 認知的トレーニング法の構成

ーム状況のビデオをただ見ただけでは状況判断の向上は見られず，適切なゲーム状況の解説と具体的に意思決定を言語化することの重要性が示唆された．

4. 状況判断の評価の発展～判断時間とスキル水準の検討～

第4章では，状況判断を測定するために，状況判断を言語化させることの有効性は示されたが，競技場面の判断する時間が反映されておらず，正確な判断に速さが求められること．さらに，スキル水準によって，状況判断に生じる違いについても明確な原因が明らかではない．このようなことから，ラグビープレーヤーを対象に，状況判断の言語化を口頭で解答させ評価し，解答までの時間を判断時間として

測定した。結果は、正確な判断を重視した従来型の状況判断のテストと、速く解答することを課題とした時間型の状況判断テストを行い、従来型と時間型のテストでは、得点に差は見られなかった。また、時間型のテストでは得点と解答時間に、有意な関係は見られなかった。しかし、状況判断テストの結果をスキル水準別に比較したところ、非レギュラーグループにおいて、時間型テストの得点が有意に低くなった。特に時間型テストで、防御状況を見落としていることが明らかであり、時間的な猶予がなくなったときに正確な情報を察知できなくなっていた。また、状況判断したプレーへの自己効力感と、状況判断したプレーを遂行できるという自己効力感について比較した結果、準レギュラーグループと非レギュラーグループについて、プレーを遂行できるという自己効力感が有意に低くなった。2つのグループは、判断には自信を持っているが、そのプレーを遂行できる自信はないという結果であった。これらの結果から、状況判断の高い評価は、正確で速い判断だと思われるが、スキル水準が低い場合に、判断の速さを意識することが判断を悪化させる要因になることが理解できた。不安や焦り、自己効力感などの心理的な要因も考慮し、状況判断の評価を考えなければならぬことが示唆された。

5. 認知的トレーニング法の発展～授業への応用～

第5章では、認知的トレーニング法の活用について検討した。授業を利用したトレーニングで、「授業を活用したラグビーの状況判断を向上させる概念的モデル」を作成し、正確な状況判断ができるようになるのかを検討した。内容は作成したモデルに従って、対象者に宣言的知識として、基本的なルール、基本的なスキル、基本的な作戦や戦術など競技特性の理解を促した。同時に、手続き的知識として、競技状況の分析と予測ができるように、認知的トレーニング法を実施して、競技場面の選択的注意や競技状況の認知、必要となるプレーの予測について教授した。結果は、未経験者の状況判断が授業後に有意に向上した。特に、ラグビー未経験者の「防御の状況」が向上した。経験者は、状況判断全体の変化はみられなかったが、「選択すべき個人のテクニク」が向上した。また、授業後の状況判断テストと知識テストには有意な相関が見られた。さらに、状

況判断テストの得点変化率と理解度については、経験者、未経験者ともに得点変化率の高い方が、理解度も有意に高い結果となった。これらのことから、「授業を活用したボールゲームの状況判断を向上させる概念的モデル」の有効性が示され、特に未経験者は、宣言的知識の習得に合わせて、認知的トレーニング法を行うことにより、手続き的知識を促進し、状況判断を向上させていることが理解できた。

6. 総括（第6章）

本研究では、ボールゲームの競技状況における状況判断に着目し、認知的トレーニング法を開発した。そのトレーニング効果を実証するためにラグビープレーヤーを対象として、トレーニングを実施し状況判断をテストによって評価した。トレーニング効果も認められ、状況判断を評価するためにプレーを言語化することも理解できた。さらに、状況判断の時間を考慮することで、スキル水準での違いを見ることができ、状況判断とスキル水準に関係があることがわかった。認知的トレーニング法を応用することについても、競技未経験者へのトレーニングで一定の効果を見ることができた。

謝辞

本研究を実施し、博士論文を作成するにあたり、多くの方々の支援を受け、完成することが出来ました。

副査を快くお引き受けくださり、温かいご指導をいただいた九州工業大学大学院脳情報専攻科の粟生修司先生、夏目季代久先生に深く感謝を申し上げます。また、外部から副査をお引き受けくださり、丁寧な指導をいただいた九州大学名誉教授の徳永幹雄先生に、深く感謝を申し上げます。

最後になりますが、本研究が完成するまでに幾度となく、叱咤激励をくださり、優しくそして的確にご指導をいただいた指導教官の磯貝浩久先生におきましては、言い尽くせぬ感謝の気持ちで溢れています。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

広域視覚情報の獲得方略に関する研究 —周辺視反応トレーニング法の構築に向けて—

今村律子（九州工業大学）

学位：博士（学術）、授与機関：九州工業大学

取得日：2014年3月25日、指導教員：磯貝浩久

1. 研究背景と目的

これまでのスポーツ選手を対象とした視覚研究では、眼球運動測定装置を使用し、注視点の座標から算出される視線位置や、注視点の停留時間から対象者の習熟度が検討されてきた。その視覚研究のほとんどが対象者と対面した状況を想定した対人場面が多く、その周辺視は対象の周辺のみと制限されており、広域範囲を周辺視の範囲とした視覚研究は極めて少ない。また、それらの視覚研究において周辺視野の評価は、視線配置パターンと注視時間からの推察にとどまっている。

一方で、熟練者特有の視線を明確にするためには、種目特性をはじめ、個人の経験や身体能力および技術レベルの影響などの考慮が重要であるとされる。つまり、常に広域の視覚情報が必要な球技選手の視覚情報の獲得方略を明らかにするには、実験環境の工夫を行い、その状況下で周辺視を評価する必要性が示されている。

そこで本研究では、広域視覚情報処理の方略を調べるために、遠くの山を見ると比喻される対象の後方に視点を置く遠山の目付という見方に着目した。すなわち、周辺視野を広げるための視覚メカニズムとして、注視点は目的対象物より後方に存在するとみなし、視覚機能の輻輳・開散運動から得られた注視点距離の長さは、周辺視を評価する手がかりと考えた。そこで本研究は、広域の視覚情報の獲得が必要とされる球技種目選手を対象とし、注視点距離から周辺視の視覚情報処理方略の解明を目指した。また、これまでの視覚研究において、主に視覚刺激に対して指押し課題といった反応形態が採用されていたが、本実験では、実際の競技実施状況に接近した全身反応課題を採用した。この2つの反応形態において、全身動作を必要としない指押し課題の場合と、全身動作を伴う全身反応課題の場合の、反応速度と注視点距離の比較を行うことを目的とした。

2. 刺激呈示サイズの違いにおける視覚情報処理の比較

刺激呈示サイズの違いによる、視覚活動時の眼球

運動計測実験を行い、その注視点距離の変化を検討した（nac社製EMR-9使用）。球技種目選手15名を対象とした。追従運動課題を行った結果、呈示サイズの違いで注視点距離に差がみられ、広い呈示刺激サイズにおいて正確な追従運動が行われていたことが明らかになった。すなわち、めまぐるしく状況が展開するスポーツ場面において、円滑な眼球運動や輻輳・開散運動は正確な判断を行うために必要であると言える。同時に、広域の刺激呈示状況を設定し、そこへ身体反応課題を組み合わせ、反応検出にアプローチすることが必要であると考えられた。

3. 注視点距離から見た周辺視の視覚情報獲得

より実践に近い実験環境を設定し、対象者（球技種目選手28名）から3m離れた視野角110°範囲内に設置された3つのモニターを使用した3条件の選択反応課題を行い、球技種目選手における視覚情報獲得方略の検討を行った。また、反応時間課題の反応時間をより実践的に評価するため、指押し課題と全身反応課題における注視点距離の比較・検討を行った。その結果、課題の複雑性の増加に伴う反応時間の遅延がみられた。また、反応時間と注視点距離の関係は、全身反応課題ですべての条件に有意な相関があり、反応時間が速いと注視点距離が長いことが示され、注視点距離が全身反応の速さに影響していることが明らかになった（図1）。すなわち、広範囲の視覚情報処理の方略として、対象のものより後方へ注視点を存在させる「遠山の目付」が有効であることが示された。

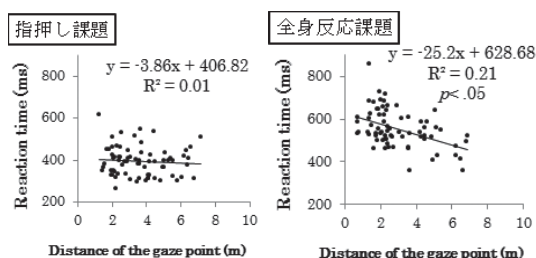


図1. 反応形態別による反応時間と注視点距離

4. 広域視野範囲におけるサッカー選手の視覚情報処理

本実験では、サッカー選手20名を対象とし、広域視野範囲の情報処理を注視点距離から検討した。実験方法は、対象者から3mの半円上にモニターを設置し、正面、有効視野110°位置、生理的視野180°の3つの視覚刺激条件において、指押し課題と全身反応課題の2つの反応形態の測定を実施した。その結果、反応形態において、全身反応課題では、注視点が長いと反応時間が速いという関連がみられた。また、指導者によるサッカー選手としてのパフォーマンス評価の順位は、全身反応課題においてすべての条件に注視点距離と有意な相関がみられ、注視点距離が長い選手はパフォーマンス評価順位が高い傾向にあることが示唆された。対象者は、全員が全国大会常連レベルの選手であった。その中でも、指導者によるパフォーマンス評価の上位（スターティングメンバー）の選手は、試行後半に注視点距離の揺動がみられた。一方、下位（ベンチメンバー）の選手たちは、一定の注視点距離を保持しながら課題を実行しており、注視点距離の揺動はほとんどみられなかった。競技レベルの高い選手の中でも、視覚情報の獲得方略の違いが明らかとなった。

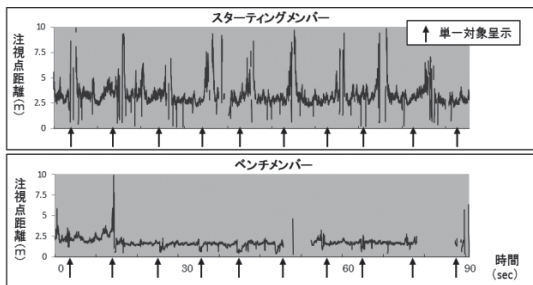


図2. 広範囲呈示に対する全身反応課題時の注視点距離の揺動

5. 総括

これまで対人場面において有効であるとされた対象よりも注視点を後方に置く「遠山の目付」という教えは、広域の視覚情報の獲得する場合にとっても有効であることが示唆された。さらに、レベルの高い選手は、広範囲の視覚情報を獲得する方略として注視点距離を変動させるといった輻輳・開散運動を活用していることが示唆された。以上のことから、

本研究をととして熟練者の広範囲の視覚情報獲得の方略を明らかにすることができたと考える。

周辺視のトレーニング法として、対象よりも後方に注視点を置くこと、注視点を固定せずに変動させるトレーニングを行うことが広域視覚情報の獲得方略として有効であることが明らかとなった。今後は、多様な競技種目や競技レベルにおいて、遠距離、広域の刺激呈示研究を積み重ねる必要がある。そこで、本研究の3つの実験を通して、以下の3つの視点から広域周辺視トレーニング法が提案された。

1) 広域の視覚呈示の設定

視覚呈示において可動式モニターを採用することで、競技種目の状況や特性によって、呈示範囲を変動させることができる。また、実際のスポーツ場面において、敵や味方の位置は、ユニフォームの色情報が必要な視覚情報となるため、モニターには色呈示によって状況判断の実践場面想定が可能である。

2) 反応形態の設定

スポーツにおける周辺視トレーニングを行う場合、視覚呈示課題に対する反応形態は、全身反応課題が良く、指押し課題では得られない臨場感のアプローチとなる。さらに、視覚呈示の条件から、方向などの動作を加えることで、視覚情報を効率よく獲得しなければならない状況が作られる。

3) 注視点距離の制御

広範囲に奥行のある呈示刺激課題を設定し、動く呈示刺激に対する輻輳・開散運動に着目することが、周辺視トレーニング法の確立につながる。本刺激の反応と同時に、広域の範囲に別刺激を提示することで、輻輳・開散運動の制御が必要な状況を作り出すことが可能となる。

モチベーションビデオがスポーツ集団の集団効力感に与える影響

永尾 雄一（日本障がい者スポーツ協会）

学位：博士（人間環境学），授与機関：九州大学

取得日：2014年3月25日，指導教員：杉山佳生准教授

【研究の目的】

本研究では，スポーツ集団に対するMVを視聴することでの，集団効力感への影響を検討することを目的とした．はじめに，わが国において未開発である，競技種目を問わずに用いることができるスポーツ場面での集団効力感尺度の開発を行った．その後，team-modelingに準拠した映像それぞれを視聴した際の集団効力感への影響を検討した．次いで，team-modelingに準拠した映像で構成されたスポーツ集団へのMVを，実際の競技場において用いた際の，集団効力感への影響の検討を行った．

【第1章】

Short et al. (2005) が開発したCEQSを基に，特定の競技種目に特化せず多くの競技に対して用いることができる，スポーツ競技場面における集団効力感を測定する尺度の開発を実施した．まず，探索的因子分析により2因子構造が示された．その後，因子分析モデルを検討することで，信頼性および妥当性を有する統計的根拠が得られることから，ステップワイズ因子分析を用いて因子分析モデルの適合性を検討するとともに，モデルに合致しない変数の削除を行った．最終的に，2因子各5項目，計10項目から成る日本版スポーツ集団効力感尺度（the Japanese Collective Efficacy Questionnaire for Sports:JCEQS）が開発された． α 係数およびG-P分析により信頼性が認められ，また，集団凝集性との相関関係や多母集団同時分析により収束的妥当性および因子の妥当性が確認された．

【第2章】

スポーツ集団に対して作成されるMV特有の構成要素であり，team-modelingに準拠した映像である「チームメイトのプレイ映像」と「チーム全体の映像」に焦点をあて，それぞれの映像を視聴すること

で心理的側面，特に集団効力感に与える影響を調査することを目的とした．実験の結果，「チームメイトのプレイ映像」「チーム全体の映像」共に，視聴することで集団効力感向上の影響をもたらすことが示された．このことにより，team-modelingに準拠する映像を視聴することは集団効力感獲得に有効な方略であることが明らかにされた．一方で，チーム全体の映像を視聴することでは，JCEQSのチームワーク因子において得点の向上がみられなかった．チームワーク因子においては，Mischel & Northcraft (1997) が提唱している集団相互作用効力感が理論的背景とされている．集団相互作用効力感の先行要因に関しては，集団が持つ課題に対して効果的なコミュニケーションを行える能力の知覚の他に，集団の問題を解決できることや効果的な態度をとれることに対する効力知覚が必要である（Stevens & Campion, 1994）との指摘もある．このことから，第2章において用いた得点後にチーム全体で歓喜する場面は，チームが勝利することや勝利するために必要なプレイを行うという課題に対して，それを達成するために必要とされる相互作用やコミュニケーション，課題に対してチームがまとまることができるという効力知覚を得るのに十分な映像ではなかったことが考えられる．スポーツ競技場面において課題達成のために行うコミュニケーションや相互作用が表現されている場面を考えた場合，例えば試合中に戦術やプレイについて選手間でコミュニケーションを取っている場面や，チームメイトに対してコーチングをしている場面，またロッカールームやハーフタイムなどでのミーティング場面，試合前の円陣などが考えられ，今後「チーム全体の映像」の心理的影響をさらに検討していく上での新たな研究視点となるであろう．

「チームメイトのプレイ映像」を視聴した際と「チーム全体の映像」を視聴した際には，集団凝集

性との相関関係に違いがみられた。Feltz et al.

(2007) は、集団効力感と集団凝集性は円環的に影響を与え合うことを報告しており、集団効力感はメンバー間の相互作用を媒介して集団凝集性へ影響する可能性が示唆されている。チームメイトのプレイ映像を視聴した際にはJCEQSのチームワーク因子で向上が示され、同時に集団凝集性との正の相関も示された。一方で、チーム全体の映像視聴時では、チームワーク因子の向上は示されず、集団凝集性との相関関係も示されなかった。JCEQSのチームワーク因子はチーム内の相互作用に関する効力信念を表す側面であることから考えても、第2章の結果は、MVが与える心理的影響の一側面として集団凝集性が考えられることを示した。

【第3章】

第2章で得られた知見をもとに、実際のスポーツ競技場面においてteam-modelingとなる映像をMVという形態で用いた場合でも、集団効力感に影響を与えるかを検討した。その結果、本研究の仮説モデル(図1)が示すように、集団効力感の向上が示された。同時に、個人レベルの心理的側面にもポジティブな変化が認められた。実際のスポーツ競技場面において用いられる集団へのMVは、当然ながら視聴する選手自身の映像も含まれている。この結果は、self-modelingとteam-modelingの双方に準拠した映像を用いたMVは、集団レベルだけでなく個人レベルの心理的側面においても好ましい影響を与える方略であることを示しており、self-modelingとなる「自分自身のプレイ映像」やteam-modelingとなる「チームメイトのプレイ映像」「チーム全体の映像」が自己効力感や集団効力感に影響を与えるという本研究の仮説モデルが支持された。また、本研究では一般的なスポーツ集団である集団競技におけるチームだけでなく、個人競技の団体戦や、国際大会に臨む代表選手団という様々なスポーツ集団において、トップアスリートも対象に含めながら検討を行い、集団効力感獲得の方略としてMVの有用性を確認した。これは、本研究で得られた知見が、競技特

性を問わず多くのスポーツ競技場面に還元され、パフォーマンス発揮に向けた取り組みに貢献できるものであると考えられる。

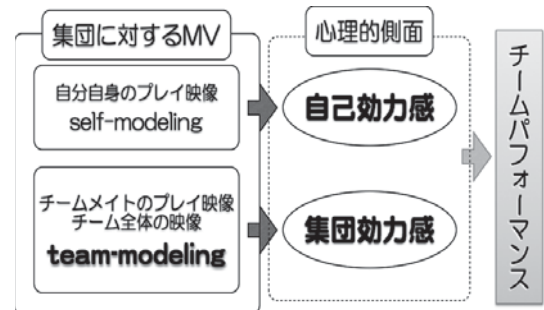


図1 スポーツ集団に対するMVの構成映像が与える心理的影響を示すモデル

付記：本論文は、様々な方からご支援、ご協力を頂いた結果、完成に至りました。主指導教員として長年のご指導を頂きました杉山佳生先生、ならびに的確なご指導を頂きました諸先生方、ご協力頂きました多くの選手・スポーツ関係者各位に心より感謝申し上げます。

V. 海外情報

海外情報

内田若希（九州大学大学院）

2013年8月から2014年3月上旬までの約7ヶ月、オーストラリアにあるUniversity of Western SydneyにVisiting Fellowとして滞在させて頂きました。University of Western Sydneyは、1989年創立の公立大学で、6つのキャンパス（バンクスタウン、ブラックタウン、キャンベルタウン、ホークスベリー、パラマタ、ペンリス）を有する、地元学生には比較的人気の高い大学です。私は、シドニー市内から西に25キロ程離れたバンクスタウン・キャンパスにあるCentre of Positive Psychology and Education (CPPE) に所属していました。このバンクスタウンは治安があまり良くないということ而得名で、他の先生方から「大学近辺に住むのはやめなさい。シティにきなさい」と言われ、英語が流暢でない私にとって、ちょっと先行き不安な部分もありました。とはいえ、7年ほど前に務めていた大学は、「駅前で発砲事件がありました。みなさん気をつけて帰宅しましょう」というアナウンスが、授業中に流れる場所にありましたし（学生から、「気をつけてどうやって？」と聞かれて回答できませんでした…）、そのあたりの心構えをもう一度見直し（?）、いざ出発となりました。

CPPEを選んだ最大の理由は、私の研究領域（自己心理学）の権威であるDr. Herbert Marshが在籍されていたためです。受け入れ可否の審査はかなり厳しいと聞いていたので、許可がおりたときには本当にホッとしました。CPPE滞在中は、Dr. Marshにメンターについて頂きました。Dr. Marshは複数の大型研究プロジェクトや大学院生の指導、長期にわたる海外出張など、非常に多忙を極めておられましたが、その合間を縫って英語の論文をチェックしアドバイスをくださったり、情報提供をしてくださったりと、なにかと気にかけてくださいました。

そのほか、CPPEには、教育心理学、ポジティブ心理学、オーストラリアの先住民族であるアボリジニの人々の問題に関する心理的支援をベースとした

研究者が所属していました。すべての研究者の方とディスカッションする時間を設けて頂き、自分の研究に対する有意義なアドバイスを頂くことができたと感じています。その中でも特に、発達障害児を対象に研究をされている先生のお話が非常に印象的でした。その方の12歳の娘さんのお友達は、糖尿病で毎日自己注射をしているそうです。「子どもなのにかわいそう…」と思う人がいるかもしれない。でも娘さんに、「お友達は幸せだと思う？」と質問をしたところ、「幸せだよ。だって彼はnormalだから」と答えたそうです。最初を知るべきは相手と自分ではなく同じなのかであって、違いを知るのはその後。ということ。…と優しい笑顔で話されました。

さて、私にはオーストラリアに滞在中にどうしても行きたい場所がありました。私の現在の研究・実践の主なフィールドはパラスポーツなのですが、このパラスポーツを取り巻く環境は、近年劇的に変化しています。リハビリテーションの一環として位置づけられていたパラリンピックは、年を追うごとにその競技レベルが向上していますし、諸外国の代表選手にはオリンピック同様の強化が実施されるなど、とりわけ海外のパラスポーツの状況の変化は目覚ましいものがあります。障害のあるトップアスリート専用のナショナルトレーニングセンターを要する国や、オリンピック選手との共用が可能なトレーニングセンターを有する国も増加しています。オーストラリアはそれら強豪国のひとつであり、日本の国立スポーツ科学センター（JISS）の設立に当たり手本となったAustralian Institute of Sport (AIS) は、オリンピック選手およびパラリンピック選手のための国の施設として位置づけられています。つまり国を代表する「トップアスリート」であるならば、障害の有無に関係なく、誰でも自由に使えるというのが基本姿勢にあります。そこで、オーストラリア滞在中に、なんとかAISに視察に行けないものかと考えていたわけです。

そんなとき、それまで日本オリンピック委員会（JOC）が文部科学省の管轄であるのに対し、日本パラリンピック委員会（JPC）が厚生労働省の管轄であるため、いまだ「パラリンピック＝福祉」の印象を払拭できずにいた日本に、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催決定のニュースが入り、また管轄省を一本化して強化を推し進めていくという情報も流れてきました。そして、JISSや日本スポーツ振興センターからAISへパラリンピックに関する視察が入るということで、JPCの永尾雄一氏にご尽力いただき、その視察団に（恐れ多くも）JPCの代表として入れて頂くことができました。この視察の際には、AISに加えてAustralian Paralympic Committee（APC）およびNSW Institute of Sport（NSWIS）にも出向き、多くの情報を収集することができました。

在外研究期間中、九州大学の先生方ならびに関係各所に多大なるご迷惑をおかけしましたが、温かく送り出してくださったみなさまに、この場を借りて深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

VI. 日本体育学会第65回大会関連

日本体育学会第65回大会案内

I. 学会大会（学会大会委員会）

- ・ 日程：2014年8月25日（月）～28日（木）
- ・ 会場：岩手大学

○学会大会スケジュール

- 8/26 12:00-13:00 理事会
- 8/27 10:00-12:00 口頭発表
13:00-14:00 キーノートレクチャー1
14:10-15:30 口頭発表
15:40-17:10 ポスター発表1
- 8/28 09:30-11:30 シンポジウム
11:40-12:20 総会
13:20-14:20 キーノートレクチャー2
14:30-16:00 ポスター発表2

<キーノートレクチャー1>

演者：町田 萌（順天堂大学）

演題：体育・スポーツにおけるリーダーシップの心理学：海外研究の動向

司会：磯貝浩久（九州工業大学）

<キーノートレクチャー2>

演者：伊藤豊彦（島根大学）

演題：体育学習における動機づけ研究の課題

司会：土屋裕睦（大阪体育大学）

<シンポジウム>

テーマ：チーム力の研究：その視点と方法を探る

企画・司会：佐々木万丈（日本女子体育大学）

演者：河津慶太（九州大学）

演者：横山慶子（工学院大学）

演者：飛田 操（福島大学）

VII. 事務局報告

平成25年度体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日時：平成25年8月28日(水) 12:00～12:50

場所：立命館大学びわこ・くさつキャンパス コラーニングハウスⅡ C508教室

出席者：中込四郎(会長)、関矢寛史(理事長)

今中國泰、磯貝浩久、佐々木万丈、土屋裕睦(学会大会委員)

伊藤豊彦、東山明子、杉山佳生(企画委員)

石井源信、菅生貴之、森 司朗、荒井弘和(広報委員)

武田守弘、田島 誠(庶務・会計委員)

欠席者：内田若希(委任状提出)(広報委員)

挨拶(中込会長)

<報告事項>

1. 前回理事会(平成25年度第1回理事会)議事録確認(庶務・会計委員会)

関矢理事長より、前回理事会の議事録の確認が要求され、修正追加変更なしで了承された。

2. 会員の異動、会費納入状況(庶務・会計委員会)

田島理事より、現時点での会員数は662名(7/1現在)、会費の納入状況は583名(8/28現在)が入金済と報告された。

3. 平成25年度決算中間報告(庶務・会計委員会)

田島理事より、平成25年度決算の中間報告が報告された。

4. 会報25号(通巻53号)について(広報委員会、庶務・会計委員会)

武田理事より、8月初旬に発行し、会員に送付したと報告された。宛先不明等で12通ほど返却され再送付を検討中であると報告された。

5. ホームページの移行について(広報委員会)

菅生理事より、ホームページの移設開設に伴い、年度事業報告、会報のPDFを掲載するよう依頼された。各委員会で対応することとする。

6. 平成25年度プレセミナー(企画委員会)

伊藤理事より、平成25年度プレセミナーを開催したと報告された。8/27の15:00-17:00、内容は「これからの教育研究環境における体育心理学」というテーマで佐久間春夫先生(立命館大学)による講演と施設見学とし、31名の参加者があったと報告された。

7. その他

関矢理事長より、以下の数点が報告された。

徳永幹雄先生が平成26年4月1日付で名誉会員となることが報告された。

第65回大会は岩手大学を当番校とし、8/25-28の日程で行われることが決定したと報告された。

体育学研究編集委員に佐々木万丈、東山明子、森司朗先生を推薦した(任期は2013.4.1から2015.3.)

31).

IJSHS編集委員に杉山佳生，土屋裕睦，加藤貴昭先生を推薦した（任期は2013. 4. 1から2015. 3. 31）。

<審議事項>

1. 会費の値上げについて

前回理事会からの継続審議事項であった会費の値上げについて審議した。値上げの理由は、1. 理事会の独自開催に向けての予算がないこと、2. 予備費が少なく年度当初の会計処理が行えず会計担当者が立て替えしていること、3. 学会大会やプレセミナーの講師に謝金をお支払いできていないこと、4. それに伴い学会大会やプレセミナーの講師を会員内から選出することとなり外部講師や外国人講師を招聘することが出来ていないこと、5. 3つの大学に分散している事務局メンバーの打ち合わせに予算が必要なことなどが挙げられた。また、他の専門領域との金額の差を考慮し、現行の1,000円から2,000円へ値上げすることとし、承認された。

2. 原稿料の値下げについて

関矢理事長より提案されたが、会費の値上げを行うことを前提に、原稿料の値下げについては行わないことで承認された。

3. プレセミナーの参加費徴収（受益者負担）について

前回理事会からの継続審議事項であったが、会費の値上げを行うことを前提に、プレセミナーの参加費徴収（受益者負担）については行わないことで承認された。

4. 会報の電子化による会報郵送の廃止について

前回理事会からの継続審議事項であったが、会費の値上げを行うことを前提に、会報の電子化による会報郵送の廃止については行わないことで承認された。

2013年度（平成25年度）体育心理学専門領域総会 議事録

2013年（平成25年）8月30日

会場：立命館大学 コラーニングハウス I 3階C303

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

III. 議長選出

IV. 報告事項

1. 体育心理学専門領域 役員選挙結果

選挙管理委員会より下記の報告があった。

- 1) 開票日；平成24年11月8日（木）17：00－19：30
- 2) 場所；大阪体育大学スポーツ心理学・カウンセリングコース 資料整理室
- 3) 立会人；荒木雅信・菅生貴之・手塚洋介・松田有司
- 4) 開票率；10.9% [会員数652名，投票数71]
- 5) 会長選挙；投票総数71，有効投票数71
- 6) 理事選挙；投票総数355，有効投票数350，無効票3，白票2
- 7) 選挙結果（以下、敬称略）

会長 中込四郎

理事 関矢寛史，土屋裕睦，杉山佳生，伊藤豊彦，石井源信，磯貝浩久，森 司朗，荒井弘和，
佐々木万丈，武田守弘，今中國泰，菅生貴之

（12位が3名あり、事務局で公正かつ厳正に抽選し、菅生貴之氏が選出された）

2. 平成25・26年度 体育心理学専門領域 理事会役員

役員の役割を下記のとおりとすることとなった。なお，事務局は関矢寛史（広島大学），田島誠（川崎医療福祉大学），武田守弘（福山平成大学）が担当することとした。

- 1) 任期 平成25年4月1日－平成27年3月31日
- 2) 会長 中込四郎
- 3) 理事 関矢寛史，土屋裕睦，杉山佳生，伊藤豊彦，石井源信，磯貝浩久，森 司朗，荒井弘和，
佐々木万丈，武田守弘，今中國泰，菅生貴之
（会長推薦理事）田島 誠，内田若希，東山明子

4) 理事会・委員会

会長 中込四郎 理事長 関矢寛史

理事 今中國泰，磯貝浩久，佐々木万丈，土屋裕睦（学会大会委員）

伊藤豊彦，東山明子，杉山佳生（企画委員）

石井源信，菅生貴之，森 司朗，内田若希，荒井弘和（広報委員）

田島 誠，武田守弘（庶務・会計委員）

監事 田村 進，木島章文 幹事 佐々木丈予

3. 平成25年度事業について

下記について事務局ならびに各委員会より報告があった。

（1）理事会（庶務・会計委員会）

第1回理事会を平成25年4月6日16時～17時55分に東京八重洲ホール612会議室にて開催した。ま

た、第2回理事会を平成25年8月28日12時～13時に立命館大学びわこ・くさつキャンパス コーポレーションハウスⅡ C508にて開催した。

(2) 体育心理学専門領域会報第25号を2013年7月20日付で発行した。(広報委員会)

(3) ホームページの移設(広報委員会)

7月より下記に新しいホームページを開設した。

<https://sites.google.com/site/jspetaiikushinrigaku/>

(4) プレセミナーの企画運営(企画委員会)

テーマ：「これからの教育研究環境における体育心理学」

講師：佐久間春夫先生(立命館大学スポーツ健康科学部)

日時：平成25年8月27日15時～17時

場所：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命21 K310

(5) 日本体育学会第64回大会における専門領域の活動(学会大会委員会)

立命館大学にて一般発表(口頭発表20, ポスター発表81の計101), キーノートレクチャー2つ, シンポジウム1つを開催した。また, バイオメカニクス専門領域シンポジウム「未来の子ども育ちに関する研究の推進～子どもを元気にするアクションプランの実現に向けて～」への演者推薦の依頼があり, 協議した結果, 群馬大学の西田順一先生を推薦した。

(6) 会員異動および年会費納入状況(庶務・会計委員会)

平成25年3月の会員数：645名

平成24年3月の会員数：652名

4. 平成25・26年度の体育学研究, IJSHS編集委員について

体育学研究編集委員(体育心理学)

佐々木万丈(日本女子体育大学), 東山明子(畿央大学), 森 司朗(鹿屋体育大学)

IJSHS編集委員(Psychology)

杉山佳生(九州大学), 土屋裕睦(大阪体育大学), 加藤貴昭(慶應義塾大学),

Leonard Zaichkowsky(Vancouver Canucks)

5. 日本体育学会名誉会員について

平成25年度臨時総会において徳永幹雄先生が平成26年4月1日付名誉会員に選ばれた旨, 事務局より報告があった。

6. 日本体育学会第65回大会

次回大会が下記の予定であるとの報告が事務局よりあった。

日時：平成26年8月25日(月)～28日(木)

場所：いわて県民情報交流センター, 盛岡地域交流センター, 岩手大学

V. 審議事項

1. 平成24年度の事業報告ならびに決算報告が庶務・会計委員会よりなされ承認された。

2. 平成25年度の予算案・決算中間報告が庶務・会計委員会よりなされ承認された。

3. 平成26年度事業計画

(1) プレセミナーの企画運営について, 大会校の施設等の都合により, 大会企画以外の企画の施設確保が困難なことから, プレセミナーを開催しないことが企画委員会より提案され承認された。

(2) 日本体育学会第66回大会における企画運営について, 従来通りの企画内容とすることが学会大会

委員会より提案され承認された。

(3) 体育心理学専門領域会報第26号を発行することが広報委員会より提案され承認された。

(4) その他

VI. 会費の値上げについて

体育心理学専門領域の予算不足から大会企画，プレセミナー企画，理事会開催，事務局業務等に多大な困難が生じていることから，平成26年度より体育心理学専門領域の会費を1,000円から2,000円に値上げすることが理事会の承認を経て事務局より提案され承認された。

VII. 議長退席

VIII. 閉会の辞

平成26年度体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日 時：平成26年4月6日(日) 15:00～17:00

場 所：名古屋大学 ES総合館 1F ES会議室

出席者：中込四郎（会長）、関矢寛史（理事長）

今中國泰，磯貝浩久，佐々木万丈，土屋裕睦（学会大会委員）

東山明子，杉山佳生（企画委員）

石井源信，菅生貴之，森 司朗，荒井弘和，内田若希（広報委員）

武田守弘，田島 誠（庶務・会計委員）

木島章文，田村 進（監事）

欠席者：伊藤豊彦（委任状提出）（企画委員）

挨拶（中込会長）

<報告事項>

1. 会員の異動（庶務・会計委員会）

田島理事より，昨年度の会員数は661名（平成24年度から16名増）と報告された。

2. 会報第26号発刊の準備状況（広報委員会）

菅生理事より，会報第26号発刊に向けての現状が報告された。研究室紹介，学位論文紹介，海外情報については，適任者を至急探し執筆を依頼することが報告された。原稿回収期限は5月末日としている。

3. 選挙管理委員の推薦（事務局）

関矢理事長より，平成27・28年度選挙の選挙管理委員として武田守弘先生を推薦した，との報告があった。

4. 学会賞選考委員の推薦（事務局）

関矢理事長より，平成26・27年度の学会賞選考委員として菅生貴之先生を推薦した，との報告があった。

5. 体罰・暴力根絶のための検討課題（事務局）

学会本部より体育心理学専門領域に対して，指導環境の整備を妨げるもの，指導者の指導理念・指導方法，第三者相談窓口によるサポートシステム構築の3つの検討課題について検討する担当者を指名し平成25年12月末までに報告せよとの依頼があった。加えて平成26年3月末を第一次報告締切，平成26年12月末を最終報告締切として報告書を提出せよとの依頼があった。そこで，関矢理事長より，担当者をそれぞれ豊田則成先生，岡澤祥訓先生，中込四郎先生とした，との報告があった。

6. 政策検討・諮問委員会委員の推薦（事務局）

日本体育学会では，今期理事会より「政策検討・諮問委員会」を新設し，日本の体育・スポーツに関わる重要な政策的・社会的課題について，学術的立場から審議検討することとなった。体育・ス

スポーツの推進に関わる政策提言やそのための調査・研究を主な任務とするこの委員会に各専門領域から委員候補者を推薦してほしいとの依頼が本部事務局からあった。委員の任期は、平成27年6月まで、会議はおおよそ1回のペースで開催される予定である。

そこで、体育心理学専門領域から佐々木万丈先生と荒井弘和先生を推薦した、との報告が関矢理事長よりあった。

7. 体育学研究編集委員の追加推薦（事務局）

体育学研究への体育心理関連論文の投稿が増えたため、平成25・26年度の編集委員を任期途中ではあるが1名追加推薦してほしいとの依頼があった。そこで、豊田則成先生を推薦した、との報告が関矢理事長よりあった。

8. 学術交流協定締結国からの発表（学会大会委員会）

今中理事より、協定国での学会での発表を相互に承認するという日本体育学会の学術交流協定に対して、体育心理学専門領域は受け入れを認めた、と報告された。発表形式は口頭およびポスター、発表言語は英語及び日本語、受け入れ年度は平成26年度からである。これにより、韓国健康・体育レクリエーション・ダンス協会、中国スポーツ科学学会、台湾体育学会の会員の日本体育学会体育心理学専門領域での学会発表が可能となる。

<審議事項>

1. 平成25年度決算（庶務・会計委員会）（資料1）

田島理事より、平成25年度決算の最終報告が提案され承認された。また、会計処理が適正であることが両監事による会計監査で認められたことが田村監事より報告された。

2. 平成26年度事業案・予算案（事務局）（資料2）

関矢理事長より、平成26年度の事業案が提案された。プレセミナーを除き従来通りの事業を継続することが提案され承認された。また、田島理事より、平成26年度予算案が提案され承認された。学会大会での謝金に関しては、体育心理学専門領域会員、他専門領域会員、非会員ごとに金額は異なるがすべての演者、司会に支払うことが承認された。

3. 第65回大会のキーノート、シンポジウム、口頭、ポスター（学会大会委員会）

今中理事より、第65回大会のスケジュール案および企画案が提案され承認された。一般発表の口頭発表は、1名ずつ発表15分、質疑応答5分の計20分とする。口頭発表の会場および時間帯が決まっているため、発表申し込み終了後に調整することがあることが承認された。また、シンポジウムおよびキーノートレクチャーの内容について以下の提案がなされ、承認された。シンポジウム「チーム力の研究:その視点と方法を探る」、キーノートレクチャー「体育・スポーツにおけるリーダーシップの心理学:海外研究の動向」「体育学習における動機づけ研究の課題」といったテーマで予定している。

4. 第65回大会の専門領域プレセミナー（企画委員会）

杉山理事より、第65回大会の専門領域プレセミナーは行わないことが提案され承認された。理由は学会大会の会期が長いこと、会場となる岩手大学の教室数が限られており大会企画以外の企画の会場が用意されないこと等であった。

5. 平成27・28年度役員選挙（事務局）

武田理事より，代議員選挙に合わせて役員(会長・理事)選挙も同時に行うことが提案され承認された。

これにより，役員選挙時の送付代を節約できることとなる。

6. 名誉会員の推薦（事務局）

関矢理事長より，名誉会員の推薦について日本体育学会理事会の意向が説明され，体育心理学専門領域からは日本体育学会理事会から推薦があった会員に関しては推薦することで承認された。

7. 体育・スポーツ科学情報コラム執筆依頼（事務局）

関矢理事長より，日本体育学会のホームページに掲載予定の体育・スポーツ科学情報コラムの執筆依頼について説明提案され，中込会長が担当することで承認された。

平成25年度決算報告

平成25年度決算報告(自 平成25年4月 至 平成26年3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		775,100	806,113	△ 31,013
前期繰越収支差額		121,768	137,034	△ 15,266
収入合計(B)		896,868	943,147	△ 46,279
支出の部				
当期支出合計(C)		785,000	796,431	△ 11,431
次期繰越収支差額(B)-(C)		111,868	146,716	△ 34,848
支出合計		896,868	943,147	△ 46,279

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		121,768	137,034	△ 15,266	
・年会費		635,000	662,000	△ 27,000	1千円×660名、2千円×1名
・郵便貯金(利息)		100	13	87	
・体育学会専門領域補助金		140,000	144,100	△ 4,100	
○収入合計(B)		896,868	943,147	△ 46,279	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	460,000	499,065	△ 39,065	第25号発行および第26号作成
	印刷費	220,000	233,100	△ 13,100	第25号
	会報送料	50,000	52,640	△ 2,640	第25号
	原稿料	180,000	170,000	10,000	5千円×(11名(第25号)+23名(第26号))
	謝礼(会報発行作業補助)	10,000	26,000	△ 16,000	補助者へのお茶代
	製本代	0	17,325	△ 17,325	会報4冊と50年記念誌の合本
・学会大会関連経費	小計	30,000	80,666	△ 50,666	第64回大会
	謝礼(演者)	30,000	30,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	プレセミナー会場使用料	0	0	0	
	プレセミナー演者懇親会費	0	0	0	
	プレセミナー案内送料	0	46,266	△ 46,266	
	シンポジウム打ち合わせ補助	0	4,400	△ 4,400	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	90,000	20,360	69,640	第2回理事会弁当代
・会議費	理事会、委員会開催等費用	200,000	195,420	4,580	旅費交通費・弁当代等
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	920	4,080	
・当期支出合計(C)		785,000	796,431	△ 11,431	
・予備費(B)-(C)		111,868	146,716	△ 34,848	
○支出合計		896,868	943,147	△ 46,279	

△は超過

*会員数昨年度645名から661名へと16名増

平成26年 4月 6日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

田村 進

木島 孝文

資料2

平成26年度予算案

平成26年度予算案(自 平成26年4月 至 平成27年 3月)

○収入の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		137,034	146,716	△ 9,682	
・年会費		662,000	1,320,000	△ 658,000	2千円×660名
・郵便貯金(利息)		13	100	△ 87	
・体育学会専門領域補助金		144,100	140,000	4,100	
・平成26・27年度代議員選挙発送費		0	55,760	△ 55,760	郵送費82円×680名
・当期収入合計(A)		806,113	1,515,860	△ 709,747	
○収入合計(B)		943,147	1,662,576	△ 719,429	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	印刷費, 郵送料, 会報作成補助費等	499,065	590,000	△ 90,935	第26号発行および第27号作成
	印刷費	233,100	240,000	△ 6,900	
	会報送料	52,640	50,000	2,640	
	原稿料	170,000	180,000	△ 10,000	
	謝礼(会報発行作業補助)	26,000	20,000	6,000	
	製本代	17,325	0	17,325	
	会報等資料のPDF化費	0	100,000	△ 100,000	
・学会大会関連経費	小計	80,666	75,000	5,666	第65回大会
	謝礼(演者・司会)	30,000	30,000	0	非会員・専門領域非会員対象
	交通費補助	0	40,000	△ 40,000	非会員・専門領域非会員対象
	プレセミナー会場使用料	0	0	0	
	プレセミナー演者懇親会費	0	0	0	
	プレセミナー案内送料	46,266	0	46,266	
	シンポジウム打ち合わせ補助	4,400	5,000	△ 600	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	0	200,000	△ 200,000	
・役員選挙実施費	郵送費, 色紙代, 文具等	0	100,000	△ 100,000	
・事務局事務費	文具, コピー費	20,360	70,000	△ 49,640	
・会議費	理事会, 委員会開催費用	195,420	330,000	△ 134,580	旅費交通費・弁当代等
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	920	5,000	△ 4,080	
・返還金	年会費の返還金	0	1,000	△ 1,000	平成25年度年会費過払いの返還
・当期支出合計(C)		796,431	1,371,000	△ 574,569	
・予備費(B)－(C)		146,716	291,576	△ 144,860	
○支出合計		943,147	1,662,576	△ 719,429	

△は超過

編集後記

会報第26号（通巻第54号）ができましたので、会員のみなさまにお届けいたします。

本号の構成は、例年とほとんど変わらないものであり、立命館大学で開催された日本体育学会第64回大会での発表内容や傍聴記、学位論文紹介8件、研究室紹介1件、海外情報1件、また5つの研究会活動報告など盛りだくさんの内容になっています。

これからの体育心理学の益々の発展のために、特に若手研究者には新しい旋風を巻き起こされて、ご尽力されることを切に願っております。

最後に、大変お忙しい中原稿執筆にご協力いただいた先生方に対し、心よりお礼を申し上げますとともに、発刊にあたりご尽力いただいた事務局の先生方に感謝申し上げます。

広報委員会委員長 石井源信

日本体育学会体育心理学専門領域会報 第26号（通巻第54号）

発行 平成26年7月20日 発行（非売品）
発行責任者 関矢 寛史（代表）
発行所 日本体育学会体育心理学専門領域事務局
〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1
広島大学大学院総合科学研究科
TEL & FAX : 082-424-6587
E-mail : tshinri@hiroshima-u.ac.jp
URL : <https://sites.google.com/site/jspetaiikushinrigaku/>

印刷 かもめいと有限会社
